



創造都市交流 2007 - 2008

事業実施レポート

Creative Cities Exchange 2007-2008 Report

## 1 事業趣旨

---

横浜市では、文化芸術による創造性を活かしたまちづくり（＝創造都市）の実現を目指した取り組みを進めており、その一環として2005年度より海外の創造都市（＝クリエイティブシティ）との交流事業を実施しています。今年度も海外創造都市を視察し、先進事例を学び、それらを自分たちの団体活動につなげるとともに、国内外の諸主体とのネットワークを強め、創造都市づくりの推進に寄与することを目指します。

## 2 事業概要

---

今年度はアーティストや市民の芸術活動団体を支援する中間支援団体を対象に、その機能強化を図るため、海外の中間支援団体の活動内容や組織、仕組み、資金調達方法などを調査し、今後の自分たちの活動に役立てる内容としました。

主な視察先のオランダのアムステルダムやロッテルダムは、クリエイティブシティ推進に積極的に取り組み、大きな成果を上げています。NPO等の中間支援組織も数多く活躍しており、また行政・NPO・企業の3つのセクターが協働することで、大きな推進力を発揮しているのが特徴です。

視察参加者は横浜市内で活動している中間支援団体から4団体を公募・選考し、10月下旬にオランダ及びドイツに派遣しました。そしてその成果を今後の団体活動に具体的に活かすためのアクションプランを作成しました。

シンポジウムでは、視察先のオランダから講師を招聘し、多様な主体による活動が盛んなオランダ・モデルと呼ばれる事例を紹介するとともに、横浜における中間支援組織の活動のあり方について意見交換を行いました。

### 【参考】 過去2年間の事業概要

#### 2005年度

日・EU市民交流年を機に、アートによる地域活性をテーマとして、日本各地のアートNPOと地方公共団体がペアを組み、EU6カ国（英国、イタリア、アイルランド、フランス、フィンランド、ドイツ）の創造都市戦略の取り組みを視察しました。

#### 2006年度

創造都市のコンセプトであるArts for Communityの一環として「教育」にテーマを絞り、コミュニティアートの歴史が深く先進事例の豊富な英国と、10年ほどで急速に文化政策を発展させたシンガポールを訪問する調査交流プログラムを実施しました。

## 2 シンポジウム「クリエイティブシティ・ヨコハマの展望」 —多様な主体による推進事例を海外に学ぶ

日時：平成 20 年 1 月 25 日（金）14:00 ~ 18:00  
会場：横浜赤レンガ倉庫 1 号館 3F ホール 入場者数：153 人



## 「創造都市・横浜」について・シンポジウムについてのイントロダクション

藁谷はるか [財団法人 横浜市芸術文化振興財団 事業開発グループ長]

本日は、多勢の方々にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。本日の参加者の皆さまには、遠くは九州や関西からもお越しただいていただき、創造都市への関心の高さが窺われます。

本日のシンポジウムは、横浜市の創造都市の推進をしております開港150周年・創造都市事業本部と財団法人横浜市芸術文化振興財団が主催しております、今年が3年目となります。

この創造都市交流事業は、2005年度にEUと日本の市民交流年をきっかけとして始まりました。これはEU6カ国から提案がありまして、EU諸国と日本の間で市民レベルの文化交流をしたいということで横浜市に話が持ち込まれました。

そこでこの年は、これら6カ国に国内各都市のアートNPOと行政を組み合わせた視察団を派遣し、またその後、6カ国からアーティストなどをお呼びしまして、ワークショップをしたり、シンポジウムを開催したりということで始まりました。

1回目はどちらかといいますと、EU諸国の創造都市の取り組み事例を数多く、幅広く見るという目的だったのですが、昨年度、2年目の2006年度は教育にテーマを絞りまして、視察団をロンドンとシンガポールに派遣しました。そして、2都市からアーティストを呼びまして、ワークショップをし、最後にやはりシンポジウムを行うというプロジェクトを行なってまいりました。

そして3年目となります今年度は、まず昨年7月に、クリエイティブシティの理論の提唱者でもありますチャールズ・ランドリーさんをお呼びしまして、この同じ会場である赤レンガ倉庫で講演会を行いました。

その後、創造都市交流事業の3回目といたしまして、10月末に、今年度はオランダとドイツに視察団を派遣して視察してきました。今回の視察のテーマは、「中間支援組織のあり方を海外に学ぶ」と設定いたしました。日本では、この横浜でもNPOの活動がだんだん活発になってきており、今後も活躍が期待される場所ですが、そういったNPOなど中間支援組織が行政や民間企業と協働して、活発に活動している事例を、海外で視察するという趣旨で視察を行ってきました。

本日のシンポジウムは、視察先のオランダから2名のゲストの方々をお呼びして、オランダのクリエイティブシティの取り組みについてご紹介いただきます。

お一人は、アムステルダム市役所からお越しいただきましたロバート・マライニセンさん、もう一方は、エヴァ・テ・クラークさんです。今回の視察で参加者一同が最も大きなインパクトを受けた場所というのが、造船所跡の広大な敷地に建つ工場跡をアートセンターとして活用している所だったのですが、その代表の方がこのエヴァさんで、ぜひお呼びしたいということで、今回実現しました。前半、お二人から基調講演とプレゼンテーションがありますので、オランダの興味深い事例について、お楽しみいただけたと思います。

後半は、パネル・ディスカッションです。オランダの2名のゲスト

の方々、日本側からのゲストの皆さんにも参加していただきまして、オランダの事例を踏まえた上で、今後横浜がどのように創造都市の政策を進めていくかという話が深まればと思っております。

それから、今回視察に参加した団体は、横浜市内で中間支援機能を担う団体を公募しました。全部で12組の応募があったのですが、その中で4団体を選考して派遣しました。その4団体が実際に向こうで見てきたことを参考に、今後自分たちの団体の活動に具体的に視察の成果をどのように活かしていくか、というアクションプランを作ってくださいました。そこで、各団体からこのアクションプランのプレゼンテーションを最後に行います。

本日は全部で4時間にわたる長丁場のシンポジウムですが、ぜひ最後までお聞きいただき、ご質問やご意見があれば積極的にお出しいただき、皆さまとともに有意義な時間としてまいりたいと思っております。

## 基調講演「クリエイティブシティの取組・最新事情」

ロバート・マライニセン(オランダ)

クリエイティブ・シティズ・アムステルダム・エアリア(CCAA)プログラム・マネジャー

講演を始める前に拍手をちょうだいし、ありがたく思います。終了時にも、皆さま方の拍手に値するような講演ができればと思います。まず、この講演にお集まりいただきどうもありがとうございます。また横浜市におかれましては、ご招聘くださいましたことを御礼申し上げます。私の講演は1時間の予定ですが、皆さま方が退屈することのないように努めたいと思っています。1時間という講演は、相当長い講演ですから、いずれにしても始めたいと思います。

まず、クリエイティブ・シティズ・アムステルダム・エアリア(CCAA)のプロジェクトについてお話ししたいと思います。さて、スクリーン上に七つの点で表しているのが、アムステルダム地域内の七つの都市で、これらは自治体間協力をしています。そのうちの一つがアムステルダムで、この域内では、大都市で最もクリエイティブな都市です。ただ、都市間でもクリエイティブであるためには域内協力をしていかなければなりません。というのは、世界的にも競争が激化しているからです。アムステルダムや横浜だけがクリエイティブシティになろうとしているわけではありません。少なくとも世界中に1000は、世界のクリエイティブシティ、将来のクリエイティブシティを標榜している都市があるでしょう。その仲間入りをするためには、努力を重ねていかなければなりません。そのために、このプロジェクトがスタートいたしました。

こちらは私の名前です(01)。私がプログラムの一部を統括しております。同僚が10人おまして、プロジェクトにかかわっております。それぞれのメンバーがそれぞれの専門分野を持っています。私の専門は国際渉外担当ですので、今回もこちらにおじゃましているわけです。アート団体とやり取りをする担当者もおり、メディアグループ、建築家、またわれわれがクリエイティブな企業と見なす企業とのやり取りをする担当者があります。このクリエイティブ産業の考え方については後ほどお話ししたいと思います。

信じていただけるかどうか分かりませんが、1年前のある朝、アムステルダムの小さなアパートのわが家で目を覚ますと、隣の向かいの建築プロジェクトにグラフィックアーティストが、スプレーペインティングをしていました。窓を開けて、「Just a master inside

your little cage」と書かれた言葉を見たとき、これはまさに私に対するメッセージに違いないと思いました。恐らく、皆さんに向けてのメッセージでもあり得るかと思います。なぜなら、国際的にさまざまな経験を積むことの利点は、まさに私自身が体験していることだからです。アムステルダムという小さなかごの中で最も効果的に仕事ができる、つまり、そのかごの中では、私はアーティストのこともよく知っており、政治家も知っていて、物事のやり方も知っている。それこそがまさに私の日常であり、日々の仕事なのです。ですから、ほかの都市におじゃまして学べることの一つは、よそでは違うやり方があるということです。十分な謙虚さを持っていれば、自分の小さなかごの中でだけ自分が巨匠であり得る、そしてそれが認識できれば、ほかのかごの中に住んでいるほかの巨匠たちと話をし、何が違うかを知り、お互いから学び合うということは興味深いことです。横浜ではアムステルダムとは若干違うやり方でこんなことを行っているということが分かれば、それを学ぶことによってアムステルダムがよりクリエイティブになれるというわけです。

ですから、私は、横浜からアムステルダムの視察にいらした方々が横浜に反映できる何を学ばれたか、ぜひお伺いしたいと思っています。単なる模倣ではなく、思考も必要です。クリエイティブシティというのはすべて頭の中に存在するものだからです。誰もがクリエイティブになり得るのです。皆さん全員が、クリエイティブシティ・ヨコハマの代表です。そして、横浜市をよりクリエイティブに変革している立場の方たちです。

私たちの組織(CCAA)は昨年9月に創設しましたのでまだ歴史は浅いのですが、当時アムステルダム地域に欠けているものがある、ということが認識されてきました。市内でいろいろな政策があり、プロジェクトも実施されてはいましたが、全体を把握している人が一人もいませんでした。

まずやるべきことのの一つが、様々な方面であらゆる人々と接触し、現状を把握するというので、これを双方向のゲームでやってみることにしました。もちろん、私たちは、政治家が求めることをやっていたいかなければなりません。というのも、第一にアムステルダムをよりクリエイティブにするというのが、私たちの主たる目標だからです。でもそれとは逆に、われわれの側が政治家に対し、アムステルダム市、アムステルダム地域をよりクリエイティブにしたいというのであるならば、この政策のこの部分は変更すべき、あるいは新しい法規制を作るべき、新たな資金調達が必要だということを伝えるのです。

私たちの立場はNPOに似ているかと思います。政府の干渉を受けず、比較的自由に活動できますし、体制の中で独自の役割を果たすことができます。これは極めてアムステルダムのなやり方の一例ということができるでしょう。

二つ目には、私たちはクリエイティブ産業に対してサービスを提供しています。つまり、アムステルダム域内の七つの市から1社以上複数のクリエイティブ産業の企業や、あるいはそこで働いている



人々が共通して問題を抱えていて、例えばアーティストのビジネススキルを向上させたいとか、資金が必要だという要請があれば、資金、マネジメントスキルなどを提供しようとする。そしてきちんと実施できるプロジェクトに転換していきます。ただ、これはクリエイティブ産業に従事している人々や企業側から要請があって初めて実施されるプロジェクトです。われわれの側がオフィスに座って、何が必要かこちらで考えて始めるということではありません。資金が必要と言ってくる人もたくさんいます。それに私たちは対応して解決しようとしています。

もう一つ、アムステルダム首都圏をクリエイティブシティとして促進するというのがわれわれの仕事の一つです。将来的には全世界のクリエイティブシティが協力することになると見えています。例えばロンドン、香港、ニューヨークなどは世界の金融の中心地ですが、お互い密接に連携しています。10年以内に世界中でクリエイティブシティのそういったシステムができるはずで、必ず、東京、横浜のクリエイターたちが、そしてクリエイターたちのいる地域がそうしたクリエイティブシティのセンターの一つになるはずで、それについては疑う余地はありません。アムステルダムもそういったセンターの一つになるべく努力をしていますが、われわれの立場というのは、横浜に比べてかなり厳しいものがあります。というのは、ロンドンなど大きな都市と競合していかなくてはならないからです。そういった競争なのでとても大変ですが、私たちは努力しています。

2006年に選任された新しい市議会は、ほとんどが30代の若い人たちが構成されていて、クリエイティブシティについても、クリエイティブ経済についても理解がある人たちでした。初めて市議会議長にメールを送ると、ほとんど5～10分で返信が戻ってきます。非常に珍しいことです。通常は部局長のところにメールを回し、市議会議長のところにメールが行くというような形でしたが、今はこのメールを直接送って、すぐに反応が得られます。

これら三つが新しい市議会に設定された目標です(02)。既に翻訳者が翻訳済みかもしれませんが、私の方からご説明したいと思います。例えば、「アムステルダムはクリエイティブシティの息づく街であり続ける。アムステルダムは欧州のワールドクラスの都市の中でも、独自のユニークなニッチ※1を持った都市として確立する」というのが私たちの主な目標です。ユニークでニッチというところが重要です。

これは、アムステルダムだけではなくほかの都市もそうだと思います。



ますが、群集の中で目立たなくてはなりません。アムステルダムにとって、その基本的な資産はメンタリティです。リベラルで相当にオープンです。そして、アムステルダム地域で生活したり仕事したりしていますと、クリエイティブになれます。恐らく誰でも、考えたことは何でもやってみることができる場所だと思います。基本的にそれに腹を立てる人は誰もいません。それこそがまさにアムステルダムにとっての一番大きな資産だと思います。ただ、規模では競うことはしません。というのは、ほかの都市の方がはるかに大きな都市だからです。けれども、われわれはメンタリティで競い合っていきたいと思っています。

ただ、冒頭で申し上げたとおり、世界中の主要な都市が競い合っていますので、ユニークである、そして違いを出せるように努力する必要があります。

それでは若干、理論についてお話をしたいと思います。学者ではないのですが、こういった議論ではよく混同されることがあるからです。特にヨーロッパにおきましては、人々はクリエイティブクラスをクリエイティブシティと、あるいはクリエイティブインダストリーなどと混同してしまっています。

リチャード・フロリダ※2のような人がクリエイティブクラスに関して本を著していますが、フロリダはクリエイティブインダストリーへの投資が必要だと主張しています。彼の著書が日本語に翻訳されているかどうかは知りませんが、もしされているならば、数少ない必読書の一つといえると思います。というのは、よく書かれていて分かりやすい本だからです。ただ、クリエイティブインダストリーについて書いているわけではありません。この用語も使われてはいません。同じ定義で話しているかどうかを確認するために若干理論に触れたいと思います。まず、クリエイティブクラスですが、クリエイティブクラスというのは、人々についていっています。それぞれ個人、この会場に座っているわれわれ個人を指します。

また、ほかの学者が書いているようなことを、彼も著書の中で書いています。すなわち、新しい動きが始まっている。以前は、人々は物を作ることで日々の生計を立てていました。20年前には何もかもが日本製という時期がありました。欧州では、そうした生産をやめてしまいました。というのは、日本の方が安価で良質なものを生産できたからです。今や、ほとんどが中国製になっています。生産拠点は世界を点々としているわけですが、われわれの経済は頭脳を使って働く人々に依存するようになってきました。頭脳のパワーが新しい経済的な道具になっています。ゆえに、すべてのクリエイティブシティがこうした世の中の変化を背景にどんどんクリエイティブになろうとしています。世の中が変化しているのですから都市も変わっていかなくてはなりません。

クリエイティブクラスの定義は、こちらにあります。すべてクリエイティブな方法で、頭脳を使って問題を解決する人々を指すということです。それらは複雑な知識体系、学校、大学、職場で学んだ知識を活かして個別の問題を解決していく人たちです。恐らく会場内に都市計画担当の方々もおられるでしょう。この方たちもクリエイティブクラスの一員です。私のような市の職員もその一部です。ヨーロッパの都市では人口の、そして労働人口の多い40～50%がこのクリエイティブクラスに属し、かなりの部分を占めていると思

ます。一部の都市では、少数がアーティストである、そしてその部分を占めているのは少ないと思います。もちろん重要なのですが、その割合は小さいのです。

この理論はアメリカの状況に即したもので、彼の理論では都市あるいは経済は三つの対象に投資すべきとしています。第一に、才能です。大きな頭脳のパワーを持った人々、そして人々に教育を施すことによって頭脳の力を生み出すか、あるいはほかの都市から頭脳パワーを誘致するか、いずれにしても世界的な頭脳をめぐる競争戦が起こっています。その頭脳も買い取ろうとしています。都市はほかの都市から頭脳を引き付け、買おうとしています。北京、ニューヨーク、アムステルダムに留学してくれば住居、資金を提供しますよと言い、この頭脳をそういった形で買い取ろうとするというのは少し難しいコンセプトではありますが。第二に技術、ICT<sup>※3</sup>、ニューメディアなど急成長を遂げている部分です。恐らくご存じだと思うのですが、現在、世界的にゲーム産業は映画産業よりも大きくなっています。三つ目は、やはり寛容でオープンなということ。アムステルダムはまさにこの点で差別化しようとしています。われわれはこの点で秀でているからです。

ほかにも指針となる人物がいます。チャールズ・ランドリーですが、横浜にも来たことがあると思います。クリエイティブシティのコンセプトのまさに創始者であり、世界中を飛び回ってメッセージの普及に努めています。彼が定義する都市の抱える課題というのは、まさにアムステルダムを想定したもののように思えます。ですので、私はランドリーが好きです。その課題というのは、クリエイティブの文化を発展させることが大切、つまりメンタリティや文化、人々のものの考え方、協力して働くやり方です。これを成し遂げることができれば、都市の人々や頭脳が都市の抱えている問題を解決することができます。都市交通にしても、気候変動への解決策にしても、また一部にはアーティストのための新しいビジネスモデルの発見、あるいは都市にもっとクリエイティブなアーティストを引き付けるなどなどです。ただし、これもかなり広義の概念であり、クリエイティブ性をわれわれの日常生活、どんな会社でも活用することができます。何を取っても、クリエイティブ性がかなり重要なものになっていきます。クリエイティブな運動もしかりです。

次は、クリエイティブ産業についてお話しします。私もこの産業に従事しているわけですが、この枠組みの中では、私はクリエイティブ産業専任といっていると思います。アムステルダムのクリエイティブ産業の定義は、クリエイティブインダストリーは字義通り、人々のことではなく、人々が働いているクリエイティブな企業のことをいいます。主に意味とシンボリズムを伝える企業あるいは起業家を指しています。

例えば、ビジュアルアーティスト、あるいはテレビ番組でアートや文化同様、クリエイティブ性がまさに活動の焦点になっているものです。知識ではなくて文化です。そしていろいろな言語を駆使します。詩を書いてもいいです。それはクリエイティブ産業の一部にアムステルダムではなりませんし、また本を書いてもいいです。また講演をすることもその中に入り、舞台芸術のような形でクリエイティブ産業をなすことになります。

ただ、今、私のように会議でお話をするというのはクリエイティブ産業には当たりません。今、私はお話をしてお話をし、メッセージを伝えようと努力はしていますが、クリエイティブ産業には属していません。というのは、シンボリズムという意味では私は不得手だからです。

もっと事が複雑になるのは、こうした産業におけるサービスを受ける消費者を考えたときに、例えば舞台芸術家が劇場でパフォーマンスを演じる際、一般の人たちがそのパフォーマンスを見るために対価を払ってやってきます。また、ほかの企業の場合、例えばウェブデザイナーに何かを創造することを依頼する、すなわち企業の側は文化的に伝えられるメッセージの方が、退屈なメッセージよりも良いということが分かっているからです。

こうした文化的な意味を持っている財やサービスというのは、個人個人のクリエイティブ性、例えばビジュアルアーティストは普通単独で会社を興して活動しています。あるいは、集団でクリエイティブ性を発揮する場合があります。例えば映画制作には脚本家、役を演じる俳優、カメラマン、照明担当、音響担当、そして配給担当者がいます。ですので、さまざまな文化的でクリエイティブな人材が必要です。これは、アーティストとして成功を収めるのとは異なっています。こうした人々には、才能、クリエイティブ性、スキルが必要です。こういったスキルは、もちろん教えることができます。アートスクールに行くと、学ぶことができます。ですので、クリエイティブ産業といったとしても、市や国が、もっと人々をクリエイティブにするに当たって果たせる役割がないと思うのは違います。

人々はクリエイティブな人とクリエイティブでない人がいると思いがちですが、それは間違っています。みんな誰しもクリエイティブであり、単にそれを頭の中から取り出すことができるかどうかです。ですので、市の中にいいアートスクールがあれば、その都市はよりクリエイティブになり得るのです。従って、こういったことも一つ、やれることだと思います。以上が理論でした。

次に、クリエイティブ産業という意味で、この産業を三つのクラスターに分類することができます。市も、異なった役割を果たすことができます。経済学者的な観点からすると、異なった市場があるといえるでしょう。

第一にアートと文化遺産です。さまざまなビジュアルアーツ、舞台芸術、文学、文化遺産、遺跡、工芸などがあります。特にヨーロッパにおいては、国や市が例えば劇場やミュージアムなどを提供することによって大きな役割を果たしている部分です。70年代から既にこういったことは手掛けています。今もなおアートというのはアートのためにこそ価値があると信じられています。素晴らしいアート、また文化的な価値がある。経済的にはその価値というのは優れた優秀なアーティストからいずれにしても生み出されるものだと。ただアーティスト自身に投資するのも、芸術という理由からのみであり、経済的な理由からではありません。議論の余地は多少あるかもしれませんが。

二つ目の分野は、メディアエンターテインメントです。この分野は、より消費者の好み、およびテクノロジーによって牽引されています。従って、新技術などへのインキュベーター投資を行う必要があります。ですから、異なったマーケットです。

三つ目の分野は、creative b2b (business to business) servicesです。すなわちデザイナー、建築家、広告代理店、マーケ

ティング会社などが、ほかの企業に対してクリエイティビティを主に販売しています。

ここでオランダ最大の大使をご紹介せずにはいられません。それはご存じのように、ミッフィーちゃん※4です。彼女はオランダ人で、40年前に生まれました。実際にウサギの絵を描くことが好きだった人がミッフィーちゃんの生みの親です。当時ではこのウサギがオランダ最大の輸出品の一つになるとは誰も想像できなかったと思います。現在ではミッフィーちゃんは世界中で目にすることができます。多分ウサギだったからでしょう。ウサギは2匹いるだけで、ごく短時間で何倍にもなってしまいますよね。自己再生型のクリエイティブ産業とでもいえるのでしょうか。なかなかいいですね。

アムステルダムでは、クリエイティブ産業向けのプログラムを展開しています。これは市議会が昨年2007年5月に容認したもので、クリエイティブ産業プログラムのおかげで私たちも存在しているわけですね。

私たちの主な目標は、活発なクリエイティブ産業によって2010年までにアムステルダムはヨーロッパでトップ5の都市になるということです。これを実現していかなければなりません。クリエイティブ産業によって実現するのですが、そのためには先ほど説明した三つの分野が焦点となります。決して容易なことではありません。多くのことを同時に行う必要があります。言い換えれば、都市においてエコシステム、生態系を作るようなものです。

これらが現在取り組んでいる七つの主要テーマです(03)。まずクリエイティブ産業と教育を結び付けます。というのも、クリエイティブ産業の大きな部分は新しい産業から成るからです。例えばゲーム産業が最もいい例だと思えます。それから、クリエイティブ産業には正式な教育が設けられている分野もあります。クリエイティブ産業と協力して、学校などと連絡を取り、教育を改善し、人々がよりクリエイティビティを発揮できるようにして、将来的にクリエイティブ産業でより働きやすくするように取り組んでいます。

二つ目のテーマは、特に若者にとっての経済的、社会的展望です。なぜなら、多くの新しい文化や産業は、正式な美術学校からのみ生まれるのではなく、ストリート、街からも生まれてくるからです。エヴァさんと私は、横浜美術館での素晴らしい展示会を見に行きました。ゴス展です※5。ご覧になっていただくと、私が言っていることがよく分かると思いますが、これは典型的な東京スタイルです。ゴ

ス・ロリータは東京でしか見るできません。クリエイティブ産業の中には、例えばアートのスタイルですが、このように新しい何かを模索している若者たちから発生するものもあるのです。このような人々を対象として、アムステルダムではプログラムを実施しています。彼らから文化的創造的な起業家を作り出そうとしているのです。彼らは特別な何かを持っていますので、このようなスタイルからキャリアを生み出すことができるかもしれない、文化的なキャリアだけではなく利益を生むこともできるかもしれないと考えています。また、文化スカウトという人たちが街に出て、才能を持った若者たちを発掘しています。これはとてもいいプロジェクトだと思っております。

三つ目のテーマは、ほかの都市でも取り組んでいるものです。それは、起業家環境を整えるということです。なぜならば、多くのクリエイティブな人たちはビジネス界出身の人たちではないからです。取り組んでいることを進めていく上で、ある段階において必要性を感じてビジネススキルを学びたい、もしくは学ばなければならないと考えるわけです。必要になって初めてビジネススキルを学ぶ、学びたいと思うわけですが、ビジネスという観点からではこれは遅すぎる場合が多いので、より良い起業家になってもらうためにはより迅速に対応する必要があります。それによって彼らはアーティストとしての生活を維持することができるようになるのです。

四つ目のテーマは、クリエイティブ産業とほかの産業との間にクロスオーバー(交差点)を作るということです。これは簡単です。ネットワークングのイベントを開催すればいいのです。例えば、クリエイティブ企業を10社ほど招き、そして銀行を10行ほど集め、食べ物や飲み物を提供します。それでお互いに知り合うことができれば、多くの場合においては何か一緒にやろうということになります。アムステルダムでは、これがうまくいっています。アムステルダムでは現在、このようなネットワークングのイベントを開催している組織が複数あります。毎週二つほど、このようなイベントがクリエイティブ産業のさまざまな分野において開催されています。

そして、このような集まりから始まって具体化されたプロジェクトもいくつかあります。このような取り組みはほかの場所でもうまくいくと思います。通信・情報技術企業や従来型の芸術系企業でも同じようなことをやっております。美術館でもこのインターネット時代においていかに生き残るかという戦略が必要になっていると思います。これはアムステルダムの美術館や従来型のアート組織にとって全



03



04

く新しい考えでした。でも取り組む必要があるのです。

このようなことがうまくいくためには、もちろんアーティストが生活し、作業するための物理的な空間が必要です。ですから横浜で拝見させていただいたようなアートスペース<sup>※6</sup>の提供が欠かせないのです。人が創造力を発揮できる、若者がクリエイティブになれる空間が必要です。アムステルダムでは不動産市場が高騰しておりますので、将来のアーティストやクリエイティブな人たちがアムステルダムで生活し続けることができるようにするために、多くの努力が必要です。ほかの都市に拠点を移してしまわないようにしなければいけません。これについては、後ほどエヴァさんから話があると思います。彼女はアムステルダムで大きなプロジェクトに取り組んでおります。ほかにも数多くのプロジェクトが進行中です。

最後の重要なテーマですが、オランダの人口は今1600万人と少ないので、自国の市場は規模も小さくなってしまいます。だからこそ、クリエイティブ産業が生き延び、成長し続けるためには国際市場を対象とする必要があります。簡単にいえば、もっとミツフィーちゃんが必要なのです。

そして、クリエイティブな都市、創造都市の戦略や計画を練るために重要となるのは、その都市をよく理解しているということです。都市をその細部までしっかりと知っていることが大切です。また、アーティストに都市戦略を構想してもらうということもメリットがあります。

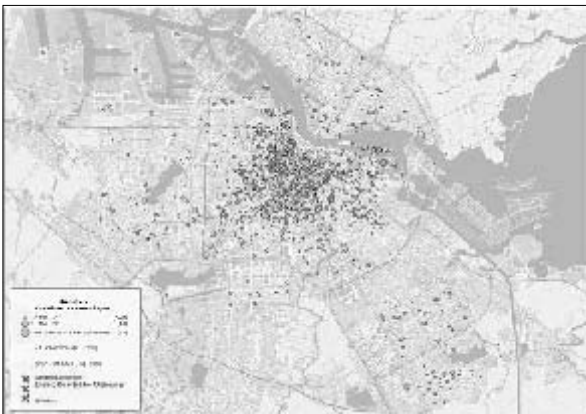
この写真は、アムステルダムの近代美術館で開かれた美術展で

撮ったものですが(04)、国際的なアーティストがどのように都市をとらえているのかをテーマにした企画でした<sup>※7</sup>。ここでは、今まで聞いたこともない、考えたこともない、さまざまなものを目にすることができました。脳みそが動き、働き始め、新しいアイデアがわき出ってくるのです。すなわち都市に、例えば幾つの企業が存在するのかといった統計だけが必要なのではなく、実際にアーティストが必要なのです。特にプロジェクトのスタート段階において、知力を大いに活用するべきです。よりオープンになることができます。

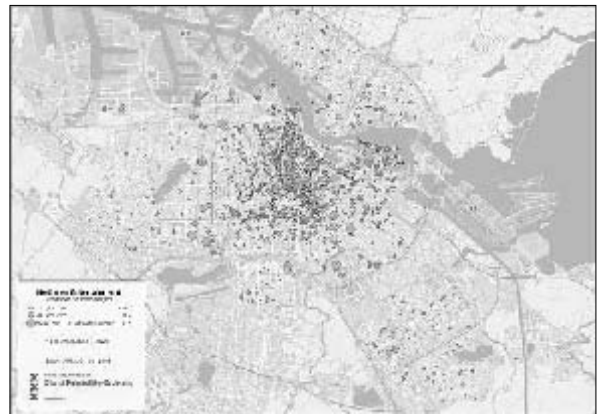
これは統計を用いてできることを示した例です(05)。一つ一つの点はアート関係のクリエイティブ企業を示しています。アムステルダムの至る所に点在しております。多くは歴史的な街の中心部に位置しておりますが、ほかの場所にもたくさんあります。もちろん小さい点は小さい企業を示しており、大きい点は大きい企業を示しております。

このスライドは、メディアエンターテインメント分野の状況を示したものです(06)。よく見るとメディアエンターテインメント分野では街の中心部から離れた場所に大きい企業が多く存在していることが分かります。これは車で通勤している従業員が多いからで、駐車場が必要だからです。また、高速道路に近い場所にも多いのです。

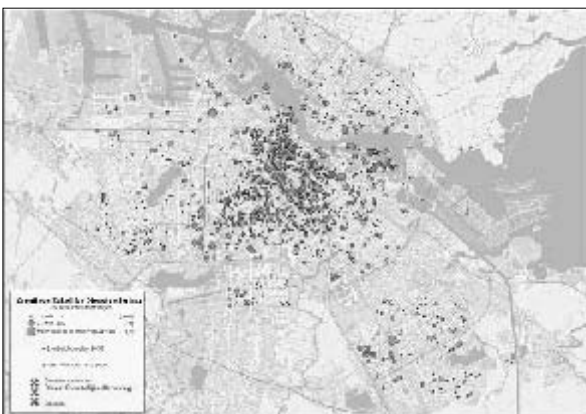
このスライドは、creative b2bの状況を示しております(07)。これらの政策を始めたときにマッピングが重要なわけですが、クリエイティビティにはクラスター化が必要ではないかと考えました。なぜ



05



06



07



08



09

ならば、英国ではそれをやっているからです。メディアクラスターなどと、さまざまなクラスターが作られております。クラスターに取り付かれているようです。

マッピングから学んだことは、仮にアムステルダムにクラスターがあったとしても、それはアムステルダムの街そのものがクラスターであるということです。そしてアムステルダムの場合には、例えばメディアクラスターといったようなものはそれほど重要ではないということを知りました。異なった企業同士が協力し合えるクラスターの方が好ましいと分かったのです。

例えば、ファッション分野ですが、ファッションデザイナーのクラスターだけではなく、モデルも必要です。キャットウォークでデザインを見せるためにはモデルが必要なのです。キャットウォークを提供してくれる会社も必要ですし、また照明や、ファッション写真のポートも必要です。

ですから、もしクラスターというものが必要というなら、それはさまざまな企業が必要だということを意味しており、またそれは経済的なセグメントとする必要もあるのです。ファッションクラスターが必要だといって、デザイナーだけのクラスターを作っても意味がありません。モデルや写真家がいなければうまくいかないのです。だからこそ、クリエイティブ経済についてよく知っておく必要があります。視覚芸術でしたら、その作品を売るためのギャラリーも必要です。多くの画家はギャラリーから収入を得ているからです。また、作品を制作するための場所、画材を購入するための場所、さまざまなサービスを受けることができる場所も必要です。

この地図は、アムステルダム市がアーティストに対して作業場を提供している場所を示しています(08)。私はクラスター化にしないでよかったと思っています。なぜならば、街のどの場所においても、古い建物や学校を維持しつつ、アーティストたちのために再開発することができるからです。エヴァさんが携わっている場所、ブリーディングスペース、もしくはそのアートの作業所の場所を示しますと、この辺りです。この上の方です。川の向こう側の方にあるのがエヴァさんの場所です。これはかなり大きな古い造船所です。でも今は、これはとてもトレンドなクリエイティブスペースになってきています。10年前は誰もこの場所に興味を持っておりませんでした。もちろんそれはエヴァさん以外ですが。



10

こちらはもう一つの例です(09)。これもまた古い倉庫でした。市がart fabric、あるいはculture fabricという民間の企業と共に再開発を試みたものです。

これはスタートしたときの写真です(10)。新しいICT企業とアートの企業を組み合わせると一つのビルに誘致し、ICT企業、メディア、ローカルテレビ局のクロスオーバーを実現しようとしたものです。ですので、ある意味ではこれを小さなクラスターととらえることができるでしょう。けれども、同一産業の企業ではなく、異なった企業が組み合わされています。こういった多様性から新しい革新的なアイデアも創出されます。

それで、1年前にオープンして、今はこんな感じです(11)。初年度は非常に成功して、街に新しい活気のある場所ができたことを受け取られました。

ただ、もちろんクリエイティブシティになりたいというのであればいろいろな場所が必要です。こちらは以前、日産自動車(株)の欧州地域統括本部があった所です(12)。車の売れ行きがさほど芳しくなく、撤退することになりました。

その後、Mexxというオランダのブランドで非常に急成長を遂げている衣料品会社に移ってきました。欧州全域に多くの店舗を展開している、国際的な会社です。国際的なスタイルで、デザイナーも50カ国以上から来ています。日本人のデザイナーも必ずいると思います。日本人の優秀なファッションデザイナーも多いからです。この会社がアムステルダムに移ってきたのは、アムステルダムがオランダのみならずヨーロッパ域内でも若いデザイナーが住みたいと思う数少ない都市の一つだということを知っていたからです。クリエイティブな人たちは、仕事があるからという理由だけではなく、頭脳パワーの争奪戦が起こっているためどこでも仕事はあるわけですが、やはり住んで面白いところで、仕事もあるという所に行きたがるからです。

Mexxは、本当の意味での才能をアムステルダムだからこそ誘致することができる考えたのです。「アムステルダムに住んで、わが社で働きませんか」という面白いコンセプトです。これは逆ではないのです。こういう形で、人材を引き付けようとしたのです。

それではBroedPlaats・アムステルダム・ブリーディング・スペースのプロジェクトについて若干触れたいと思います。後ほどエヴァの方から詳しく話があると思いますが、これはボトムアップでス



11

スタートするプロジェクトの一例です。

1970年代末、アムステルダムは好景気にわいていました。市としては、スクワット※8 されていたアートを再開発して、高級マンションや商業ビルにして、大きな利益を得ようとしていました。もちろんこれらのスペースで仕事をしていたアーティストたちは市に不満を抱くようになり、抗議を始めました。そして、さまざまな政策についての提言を行いました。

2年後、市や政治家も同意するようになりました。だからこそ、このプロジェクトが立ち上がりました。今はかなりうまくいっているの、エヴァたちのような人々に対しては大変感謝しています。こういった場所が重要であるということを、きちんと知らせてくれました。

予算ですが、3500万ユーロで、およそ2000のワーキングスペースを市内に低家賃で提供しようとしていました。この家賃は手ごろな水準で維持され、アートスペースとして向こう20年間こういった方たちが活用できるようにしました。若いクリエイティブな人々が、将来的にもこの都市で働いてくれないと、この都市もクリエイティブではいられなくなるからです。

こういったプロジェクトについて、職員数は少ないのですが、文化担当の人たちではなく不動産専門家を巻き込み、われわれは不動産ゲームができるようにしました。ビルを買い取り、再開発をし、商業ティベロッパーとともに不動産のビジネスとして取り組みました。その成果として、手ごろなワーキングスペースを提供できるようにしようとしたのです。やり方を学ぶのに2～3年かかりましたが、かなりうまくいきて、面白い場所が市内に戻ってきました。それが

一つの都市を魅力的にするやり方です。すなわちワーキングスペースを提供するという手法です。

一方で、もっと都市計画的なやり方があります。そして新しい都市計画の中に、文化的なものを取り込むというやり方があります。

こちらはアムステルダムの中央駅で、まさに市の中心部に位置しています。地域を再開発しています。商業的な理由から、大抵が通常のホテル、オフィスや超高級マンションなどになりますが、その中に文化的な施設も含めています。

こちらが新しい公立の図書館です(13)。3万平米で、インターネットが利用できるかなり近代的な図書館です。週7日朝10時から夜10時まで開館しています。屋上には大きなレストランがあって、市の眺望がききます。これは市が開発し、市が6000万ユーロを投資したものです。投資額としては大きな投資でしたが、毎日少なくとも5000人の利用者がおり、古い図書館よりも増えています。大変結構なことだと思っています。

これも同じ用地に建てた新しい建物で(14)、コンテンポラリークラシックという音楽のために建てたものです。何度か聞いていただかないと、この音楽は理解できないかもしれません。アムステルダムはある意味で、このような新しい、そして少し難しい音楽に優れています。このような分野にたくさんの人を引き付け、魅力をもたらしてくれています。だからこそ新しい芸術関係の施設についても投資を続けているのです。これもクリエイティブシティとしてやっていくための一つの側面です。

これは市だけでやっているわけではなく、さまざまな企業と協力して行っています。この再開発の一部はチャイナタウンになりますので、New Century Dragonsという中国系企業と協力してやっております。銀行も参加しています。民間企業としても、その開発物件の中に文化的な施設があることの価値を理解してくれています。従って、このような施設に対しても、一部投資をしてくれます。文化施設があった方が、マンションにせよ、オフィスビルにせよ、より早く、より高い価格で販売できることを知っているからです。成功事例の一つとして、時には交渉によって、市の投資をかなり低く抑えて新しい施設を作ることができる場合もあります。

それから、都市的な状況もクリエイティブ産業には、かなり重要な要素です。すなわちある程度の施設の集中も必要なのです。そのときには、その施設の多様性が求められます。美術館や劇場だけではなく、さまざまなクリエイティブに関連する施設が求められ



12



13



14

ます。アムステルダムではそのようにやってきております。

また、新しい空間や場所を市内に作らなければなりません。今まで作ったものとは異なったものがが必要です。異なった何かを加えることが重要なのです。もし可能なら、ほかの街とは違うものが好ましいと思います。それから、商業的価値だけではなく、文化的価値、建築物的な価値、都市的な価値などについても考えるべきです。クリエイティブ産業的な価値も一つの例です。パブリックスペース、水、緑についても投資する必要があります。

また、クリエイティブな都市には、ある程度の混合が必要です。すなわちアーティスト一人だけではクリエイティブシティにはなりません。それは都市によって求められる人数は違いますが、ある一定量は必要です。そして、さまざまなクリエイティブな人たちのミックスも必要です。視覚芸術のアーティストだけではなく、舞台芸術や、またメディア企業なども必要です。これも、これも、これも、これもというようなことです。これはとても重要なことです。

アムステルダムで学んだことは、プロジェクトの初期段階において、クリエイティブ企業やクリエイティブ産業にかかわってもらうことがとてもためになるということです。彼らにアイデアを出してもらうのです。彼らは、市のスタッフよりもずっとクリエイティブで、文化的な経験を有しています。

私は昨夏に観光客として横浜に来ました。その大きな目的の一つは、横浜市に加わった新しい施設を見るためでした。これは世界的にも有名です(15)。私は、本当にこれが気に入りました。また文化的、都市的な価値を加えなければ差別化を示すことができないということを、皆さんがよくご存じだということが分かりました。

文化政策の詳細については時間がないので、割愛させていただきますが、私たちは、中間支援組織や芸術や文化の組織に対して4年間という期間で支援を提供しております。これは、このような機関にとって重要なことだと知りました。それは、そのような機関としても市の政府から補助金を4年間にわたって受け取ることができることと事前に分かるからです。

対象機関に関しては、その4年間についてしっかりと計画を作成してもらいます。それはクリエイティブもしくは芸術的にアーティストックな観点から何を達成したいのかということ、すなわちクリエイティブなコンセプトについて明確にしろ、同時にビジネ



15 横浜大さん橋国際客船ターミナル

スマodelも構築してもらいます。例えば、美術館をどのようにして運営するのか、また芸術空間をどのようにして活用するのかなどについてです。それに基づいて4年間の補助金を提供します。

これは長期間であるということが重要です。なぜならば、その方がより良い計画を策定し、作業そのものもよりうまく実施することができるからです。1年ごとの補助金に頼らなければならないような場合、状況は難しくなってしまいます。というのは、いつ補助金が打ち切られてしまうか分からないからです。

また、特定のプロジェクトに限定されたアート基金もあります。私は4年間という期間がかなり重要だと思っておりますが、それにはまだ議論の余地があるかもしれません。

ほかに国レベルでの制度もあります。アーティストのための制度です。これもなかなかいい制度だと思っております。所得が少ない、若いアーティストを対象としているのですが、福祉プログラムの中にある規定が適用されます。これは10年間において48カ月の間、少額の所得援助を国の政府から受け取ることができるというものです。そして、アーティストには、その期間も働くことができるという特典があります。そして、芸術作品からの収入を得ることが認められております。ですから、芸術関連のビジネスを構築するチャンスが与えられるのです。

調査結果から、多くのアーティストは自らの芸術活動で十分な収入を得ることができるということが分かりましたが、その状態に達するまでには5~7年が必要です。アーティストとして成長するため、また美術館、ギャラリー、アートの愛好家が、そのアーティストの存在について知るため、そして、アーティストがその芸術的価値を売り出すために5~7年かかるということです。その後は自分の力でやっていってもらわなければなりません。

さらにこれをより良くするために、私たちはただ単に補助金を与えるだけではなく、ほかにも研修やワークショップなども開催します。マーケティングについて、事業計画をどのようにして作るのか、銀行でどのようにローンの申請をするのかなどです。また少額な文化ローンという形でこのような企業に投資することも可能です。アーティストに対してこのように投資することで、アーティストたちは自分のクリエイティブ事業を構築していくことができると強く信じております。

重要なのは、これを長期間にわたって維持することなのです。な



16

せならば、彼らはそれだけの時間を必要としているからです。

この写真は私たちの国際的なマーケティングのやり方を示した例です(16)。「私はアムステルダムです」と書いてあります。このような写真を使い、アムステルダムの考え方を示そうとしています。アムステルダムの街のマーケティングはクリエイティビティについてである、と述べています。世界のほかの都市に対して、われわれはクリエイティブなだとメッセージを発信しています。イノベーションと、商業的な考え方は、すなわちアーティストから、もしくはクリエイティビティから収益を上げようとしているのです。

アムステルダムパートナーズでもこれを行っています。官民協力事業の一例といえましょう。アムステルダムの中間支援組織の多くも官民事業となっております。

それではまとめです。アムステルダム市のアプローチはある意味で概念的で、理論やクリエイティビティなどについてよく考えますし、また学者とも協力します。何が起きているのかをより明確に理解するためです。また同時にかなり実用主義的でもあります。ですから、私たちの組織が存在しているわけでは、チャンスがあれば、チャンスを活かすようにします。地域政策の一環でない場合でも、いい機会があるのなら、できるだけ活用しようとしています。もし必要なら、その後に政策も変更します。

市の役割は、アートに対してとメディアに対してでは異なっているのです。かなり違います。担当のスタッフも別です。また、やっていることを活性化させる方法も異なっております。またそのパートナーの文化もかなり違います。アーティストと話すときと、また銀行の頭取などと話す場合では異なっておりますし、服装も話し方も違います。すべてに対して、フリーサイズのシャツで対応するようなアプローチでは決してありません。

すなわち、創造都市は、さまざまなことを、さまざまな人、さまざまなタイプの企業に対して、同時に行わなければいけないのです。

またアムステルダムでは政策について考える在り方も考慮しなければなりません。よりオープンにする必要があります。これも仕事の一環です。市の政府をよりクリエイティブに、よりオープンにする必要があるわけです。

ここからは少しリラックスすることができそうです。ありがとうございました。

#### 脚注

- ※1 niche
- ※2 Richard Florida
- ※3 ICT : Information and Communication Technology
- ※4 miffy : Illustrations Dick Bruna
- ※5 ゴス展 2007年12月22日～2008年3月26日に横浜美術館で開催
- ※6 BankART1929、BankART NYK
- ※7 Mapping the City : the title of an exhibition in the Stedelijk Museum at Amsterdam
- ※8 squat

# プレゼンテーション「オランダにおける芸術文化再生プログラムの実践」

エヴァ・デ・クラーク(オランダ)

NDSM Wharf クリエイティブ・プロジェクト・ディベロッパー

こんにちは。エヴァ・デ・クラークと申します。本日はここにわざわざ来て、大変光栄に思います。私の方からは、アーティスト自らが立ち上げたプロジェクトをご紹介します。

まずは、自己紹介から始めます。私はかつて、オランダでよく知られている、サイト・スペシフィック・シアター (site specific theatre) であるサイロ・シアター<sup>\*1</sup> で働いていました。またいろいろなアートプロジェクト、アート・イニシアティブ、国際的な展覧会、展示会などにもかかわっており、プロジェクトの資金調達に携わっていました。また、タレントスカウトの一人で、先ほどロバートからも言及があった、アムステルダム・アート・ファンドに若いアーティストたちの助成金申請を支援してまいりました。そしてそのプロジェクトがうまくいくように支援してきました。特に北アムステルダムはほかの地域とは随分異なっていて、アートの支援について知らない若いアーティストもたくさんいましたので、そういった支援を行ってきました。それから、アムステルダムのスクワットされた24のビルの連合会の会長でもあります。この連合会は93年に創設され、若いアーティストのイニシアティブの利害を代弁するものです。これが、これまでの私の職歴です。

NDSM<sup>\*2</sup> は99年から創始されたものですが、私はこのプロジェクトの創始者で8年間かかわっています。もちろん生計のためにフリーランスの仕事もしています。ヒップホップスクールのアドミニストレーターを務めています。ヒップホップをまじめなアートとして取り上げたいという思いで、スクールをやっています。

またエネルギーシステム、すなわち独自のエネルギー会社をNDSM用に作っています。これはアーティストが設計したもので、後ほど説明しますが、自治自立の精神に合ったものです。そしてエネルギーを供給し、また利益も得ています。

私自身は、ボトムアップによる都市再生の信奉者でありまして、その推進者でもあります。ある地域においてこれは都市再生の成功の鍵だと考えています。

私はこれまで、さまざまなプロジェクト、そしてヨーロッパにおいてもいろいろな展覧会に携わりましたし、またNDSMも難しいプロジェ

クトですが、ショーン・コネリーが演じるジェームス・ボンドが映画で言っている、「不可能だが実行できないことはない」をモットーにしております。

私たちの有名なアートビルの背景についてお話ししたいと思います。1980年代から1995年まで経済低迷期が続いていました。アムステルダムには、伝統として、またイメージとしても非常に寛容であるし、またオープンマインドだという気風があふれていて、世界中から旅行者がやってきていましたが、経済低迷期に入り、空きビルが多くなりました。アーティストは住み着く場所を求めていました。空き家になったビル、例えば川沿いには、廃校になった学校や古い工場跡などがたくさん存在していたので、多くのアーティストがそこに住み着きました。1995年には、スクワットされたビルに1000人以上のアーティストが住んでいました。そして彼らのビルが、私どもの連合会のメンバーになっています。こういったスクワットされたビルにはアートシーンでも大きな注目が集まっていた。外国の雑誌などでも、常に「オランダ・アバンギャルド」といわれていました。スクワッティングということですので、ルールがなくて、オープンな形で実験的なアートフォームを試みていました。

当時、アムステルダム市はスクワッティングについては寛容だったと思います。当時空きビルの多くを犯罪人、ギャング、マフィアなどが専有していたということから(そういうものから空ビルを守るという点からも)、1年以上空きビルになっていて、それを証明できればスクワッティングが認容されるという、少しおかしいですけども、そのような規定がありました。土地の投機を防止することにつながりましたし、また、荒廃した都心部でも魅力に乏しい地域でも、良いレストランやまた子供のための施設ができてくるということで、近隣の活性化にもつながりますので、近隣の人たちもアーティストがこういった形で占拠することを容認し、満足していました。

これらがアムステルダムのスクワットされたビルの幾つかの例です(01)。



01



02

突然、90年代後半に急速な変化が起こりました。IJ川流域にスクワットされたビルがあったわけですが、阿姆斯特ダム市がそれらを再開発して、多くの資金を投じ、また多くの会社が関与した形で、高級市場開発を意図するようになりました。そして市がこのIJ川流域の土地を売却し始めました。アーティストが利用していたビルが建っていた所です。アーティストが、利用していた古い港湾ビルから退去させられたり、あるいは解体させられたりしました。98年には自治運営されていた17のアートビルからアーティストが700人退去させられました。そして、とにかく退去しろと脅され、その多くがロッテルダム、ベルリンへと移っていきました。阿姆斯特ダムのこういった文化的な風潮には国際的な批判が高まってきました。国際的にも著名な作家なども阿姆斯特ダムにやってきて、阿姆斯特ダム市は、高級市場を重視するあまり文化的なビジョンがない、とてもきれいにはなっているが、アートを生み出すのではなく使い尽くそうとしていると批判するようになりました。そして、阿姆斯特ダム市自ら、その魅力を失い、寛容でクリエイティブなイメージを失っていききました。また阿姆斯特ダム市は非常に人口も過密ですので、スペースの確保が難しくなってきました。数少なく残されていたスペースも脅威にさらされるようになりました。

それで、こういった抗議を行うようになりました(02)。これは、われわれが抗議のために行ったポスターキャンペーンの一例です。鉄道の駅や空港で、「阿姆斯特ダムはもう退屈になってしまった。クリーンになってしまったので、もう来ないでください」というメッセージを出しました。非常に抗議をたくさん行い、メディアや、また報道関係者の注目も集めるようになりました。その結果として、市議会もまともに取り合うようになりました。そしてシティホールでの公聴会を開催するにこぎ着けました。抗議をしていたのはわれわれだけではなく、もっと制度化され体制化されたアート団体なども、阿姆斯特ダムの文化的な政策によってクリエイティブな風潮が脅威にさらされていると感じるようになっていました。

その時点で市議会が、フリーティング・スペース・ファンドを立ち上げました。これは、アーティストに手ごろな値段でワーキングスペースを提供するためのものです。アーティストは収入があつたり、なかったり、ワーキングスペースを確保するのが非常に困難です。ですので、市の方は4年間の予算を付けて、アーティストやアート・イニシアティブのために、マーケットからビルを取り戻して、アーテ

ィストが利用できるような形にしました。

それと同時に、アーティスト自らが、有名な建築家あるいはアドバイザー、住宅会社と共に代替的な都市開発計画を作りました。自分たち自身で、どのようにして開発していくかという計画です。今まではトップダウンの手法が採用されていたのですが、活気のある都市を作るためにはエンドユーザーこそがオーナーシップを持って、そこに生活する人たちが重要な役割を果たすべきだという理念に基づいています。この都市開発計画は、全体としての都市(Stad als Casco)という意味で、日本語にしやすいするためにCity of Standing Walls(しっかりとした基本構造体を持つ都市)と名付けました。これに関する本も著しましたし、また多くの支援も得るようになりました。

その理念についてご説明しますと、エンドユーザーが主導する開発である、ということです。責任を共有し、まさに自分たち自身がオーナーであり、どのように建物あるいは地域、街路を設計するかという意思決定に参画する、そして、ただ単に発言するだけではなく、積極的にプロジェクトに参画する、また金銭的にも参画することによって開発からの利益もきちんと享受するようになるという形です。

開発におけるエンドユーザーの重要な役割、すなわちNDSMの場合はそれがアーティスト集団でしたので、彼らが重要な役割を果たすということになりました。開発の責任を取り、ビルに資金を出すのであれば、その設計についても自由にできる。そしてエンドユーザーがこのビルの利用、また建物の組織、メンテナンスに責任を持つということが重要です。そうしないとただ単に消費するだけになってしまいます。

多くのアーティストたちが退去されたのですが、われわれはKinetic Northという自分たち自身の団体を形成し、阿姆斯特ダム北部の放棄された造船所、NDSM Wharfに移動しました。この赤いスポットが阿姆斯特ダム北部で、黄色いスポットが鉄道の中央駅を示しています(03)。

こちらに何枚か写真があります(04)。左の端の所にある、この建物が見えますか。これがまさに私の出身地です。サイロ・グレイン(Silo Grain)の工場で、非常に有名だったのですが、ここから完全に人々は退去させられ、高級住宅化して退屈なものになってしまいました。いやいや、そうは言わずに、すっかり変わってしまったと言う



03



04



05



06



07



08

べきかもしれません。

NDSMに惹かれたのは、以前site specific theatreで仕事をしていたときに、まさにこの場所こそが多くのシアターパフォーマンスを行った所だったということです。site specific theatreというのは、まさにその場で、そのときに、演劇をするというものです。壁などのない、屋外でまさにそのサイトでパフォーマンスをする、とても人気のある手法です。テキストなしのビジュアルなもので、いろいろなアーティストが協力するというもので、まさにこの場所がうってつけでした。

こちらが造船所で、大きな船が造られていた所です(05)。NDSM Wharfでは、造船業自体は1984年に停止されて以降、使われずに放棄されたままになっていて、荒廃していました。もうひどい状況でした。

これは冬の様子です(06)。長い間、雪があります。

NDSM Wharfの建物は北アムステルダムローカル・シティ・カウンシルの所有になっています。アムステルダムにはカウンシルがいくつかあります。中央にはシティカウンシルがあって、その他東西南北に地域別のカウンシルがあります。NDSMが属している北アムステルダムのローカルカウンシルは、Kinetic Northのアーティストたちが一時的にその敷地を使い、借りるということを認めました。もちろん賃料は払います。

NDSMの倉庫は惨たんたる状態で、天井はもはや天井ではなく、

長年メンテされておらず、その損害額は500万ユーロ、日本円では私の古い計算機で計算したのですけれども、およそ6億7000万円相当でした<sup>※3</sup>。ローカルカウンシルは、このNDSM倉庫に投資するという意向は全くなくて、一時的にアーティストに使わせてもいいではないか、5~6年たったら解体して、まともな高級市場向けに開発をしようとしていました。そのためにも、アーティストが入っていれば、この地域の事業誘致にもいいだろうと考えていました。

しかし、われわれは建物のオーナーとして、あまりにも状態がひどく、そのままでは使えないので、スタジオ用のフロアやインフラを整備するという計画を作りました。それがすなわちCity of Standing Wallsの理念です。

ドアが開いています。これが、以前の様子です。われわれが入ってきたときの状況です(07)(08)。

そして、われわれはプロジェクトのプラン策定に着手しました。どのように組織を編成するか。みんなアーティストだったのですけれども、頭の切れる人もいて、このプロジェクトを三つの個別の部門に分けました。そもそも40人くらいのアーティストがここに移ってきました。それぞれ得手不得手があり、関心事も一樣に同じということではなかったため、三つの部門に分け、それぞれで企画を行いました。

まず一つ目が、改装とそのためファイナンスで、これを開発(Development)と呼びました。



09

そして二つ目ですけれども、どう訳してよいのかよく分からなかったので、開拓(Exploitation)という言葉を使ったのですが、賃貸し、メンテナンスし、ごみの処理といったような利用の側面です。

それから当然のことながらアーティストですので、企画(Programming)：文化活動として一般の人々に作品を展示し、収益を得たいと思いました。

こういった三つの事業計画を策定し、改装をしている間にも既にその利用を始める、もっとアーティストを誘致し、賃料を稼ごうということを考えました。そして自分たち自身でこのスペースを賃し出すことによって利益を得よう、フェスティバルあるいはその他の活動もやっていこうと考えました。こういったことを同時に行うというのは珍しいことだと思います。

建築のプロセスなのですけれども、先ほどお話ししました、基本構造のある都市という理念で設計を始める前に、まずは入居してもらうことが大事だと考えました。そもそもはじめに40人のアーティストありきということで、その後ほかのアーティストを誘い、そして選抜しました。

選抜基準としては、実験的なアーティストであり、収入が少なく、政府からの制度的な支援は受けていない。また、あるアートシーンで活躍しているプロフェッショナルであるということが基準になりました。アーティストがアーティスト自身を選んだのです。エンドユーザーとして、パートナーを求めるような形です。

申し込みは非常に多く、そのうち10%のみが選定されました。で

すので、このプロジェクトへの参加意欲は非常に高かったといえると思います。例えば、画家、イラストレーター、ウェブデザイナー、グラフィックデザイナー、工芸家、写真家、劇団員など、さまざまな分野のアーティストから申し込みがありました。

いったん入居してから、キャラバンを立て、テントを立て、倉庫の中でキャンプをしているようなものだったのですけれども、組織づくりにかかりました。そして哲学者、建築家とのデザインワークショップを開催しました。

そして、改装計画が全部まとまったところで、助成金を申請しました。フリーディング・プレース・ファンドは先ほど言及しましたけれども、それがこの助成金を申請できる先だったのです。そして改装のための助成金を申請できました。

自分たち自身で投資するというのも重要でしたので、融資を得るためにCultural Bank loan、また、Culture loanといったようなものを活用しました。そして建築家を採用し、その改装に着手しました。

プロセスが始まって、そもそもが、どんな状況だったかということなのですけれども、バスがあつて、テントがあつて、ワーキングスペースを作って、これは実際設計や助成金申請の前です。みんながみんな自分たちのスペースに対しては自分たちで支払って、という形でした。

こちらは(09)、その後、どのように建築家と共に建物を設計していったかということです。大きな倉庫で2万平米あります。

こちらがフリーゾーン、こちらがアートビレッジ、こちら側にはイーストウイングがあります。それでシアターワーキングスペース、若い人たちがワークショップをできるような所があつて、プロジェクトにも若い人が随分参加しています。スケーター、ヒップホップミュージシャン、そういった独自のスペースが必要な人たちのためのスペース。後ろ側にはパブリックスペース、ギャラリー、レストラン、シアター、フィルムハウスなどがあります。非常にすてきなことです。

とても汚れていて土壌も汚染されていたので、とにかくすべて改装を新たにすることが必要でした。どのくらいの助成金を得たかということについては後ほどお話ししますが、フリーディング・プレース・ファンドということで、先ほどロバートからも話がありましたように、この建物の改装のための助成金を出してもらいました。ファンドの目的が手ごろなワーキングスペースの提供だったので、アーティストに対してではなく建物に対する助成だったことが重要です。



10



11



12



13



14



15

建物の基本構造がこの写真で見えます(10)(11)。この構造体の中で200人のアーティストたちに、自分のスペースを作ることを呼び掛けました。プロジェクトへの参加を呼び掛けたのです。個人で投資する代わりに家賃はかなり低いです。

ここでは、作っているその過程が見えます(12)。規則も作りました。一人のアーティストは最大でも100㎡までしか使えないとか、また壁を作る際は、隣人と話し合っ決めていくのです。

アーティストはあまりお金を持っておりません。でも協力することで何とかなっているのです。アーティストとしてやっていくことはとても難しく、作品を売るのも容易ではありません。ですから小規模のビジネスから成る小さな経済圏みたいなものを作ったのです。協力し合い、お互いに仕事を与え合い、共にプロジェクトなどを準備し、収入を得る。これはうまくいっています。古いスクワットされたビルでの経験があるのですが、特に80年代の不況のときなどがそうだったのですけれども、90%のアーティストは失業していました。それから10年もしくは15年たつて失業中のアーティストはたった一人でした。相互関係から、多くのメリットを受けることができたのです。

これは、市議会に伝えた重要なメッセージの一つです。大きな経済効果があるのだと。アーティストや福祉の分野での効果は小規模かもしれませんが。

ここでの作業がいかに大規模で、いかに複雑であったかを理解していただくためにまとめたスライド(13)で、さまざまなプロジェクトがここでは書き出されています。とてもわくわくするものもありま

した。

建築という面で最も大きなプロジェクトはインフラの部分でした。とても大きく、画期的なプロジェクトであり、また持続性にも投資する目的で、良好な持続可能なエネルギーシステムを求めました。また私たちは社会性を持ったアーティストの集まりですので、クリーンな環境も求めました。われわれが導入したクリーンで持続可能なエネルギーシステムは、国の政府からも表彰されました。倉庫の暖房についても、画期的な方法を活用しています。

東ウイングには、12の大きな舞台の作業場と、一つの大きな国際舞台の作業場があります。海外からのアーティストや劇団を招き、3カ月ほど滞在してもらって、一緒にパフォーマンスなどに取り組むために使っています。

アートシティは、先ほど構造体の写真をお見せしましたが、80ほどのアトリエやスタジオがあります。フリーゾーンというものもあります。ここでは構造物がないので、アーティストがから作業場を作る必要があります。スケートパークもあります。

北ウイングも先ほどお見せしましたが、ここにパブリックスペースを作る予定になっております。まだできていないのですが、外から人が来ることができるようなスペースを考えています。アウトドアレ스토랑もあります。臨時スタジオでは、室内での建設作業をやっているときに屋外に行く必要があったので、屋外に臨時スタジオを作りました。

スケートパークの下の空間は興味深いプロジェクトで、私も今、若者をコーチしております。アムステルダムノースではヒップホップが



16



17



18



Outdoor restaurant Cafe 'loc' definit

19

盛んです。貧困地域で、さまざまな文化が混じり合っています。ここでヒップホップが開花しているわけです。これは若者たちがコミュニケーションを取るともいい方法です。ラップやDJやブレイクダンスなど、とてもパワーがあります。ベルリンと比べても、ヒップホップが盛んなのは北の方です。

今私たちは、街で若者にどうやったら自分のビジネスを設立できるかなどを教えています。これは新しいプロジェクトの一つになります。

これは、フリーゾーンの一例です(14)。アーティストが自分のスペースを自分で作りました。作っている過程において、このアーティストは、自分の作品やほかの人の作品を展示しました。

これが私のスタジオです(15)。まだこの段階では作り始めたところですが。残念ながら、完成したスタジオの写真がありませんでした。私は街の中の街ということで、三つのコンテナを使っていて、ここで作業をしています。だんだんと出来上がってきているのが分かります。色も塗り始めています。

ここは1階ですが(16)、その上の2階の部分にも、もう一つスタジオの層を加えることができます。興味深いですね。全部自分たちでやったのですよ。通路などについてもいろいろと考えました。まさに都市計画です。

この通路は一つの出入り口と別の出入り口をつなぐもので、倉庫の外の通りにつながります(17)。都市計画の専門家なども交えて、かなり考えて作っていきました。ワークショップにも加わってもらったのです。一緒に作業するのは本当にいいということが分かります。

これがスケートパークです(18)。これは国ではなく、地方自治体でもなく、市の政府からの支援を受けました。青年省の支援でした。これは、あるとても有名なスケートパークで、スクワットされたビルの中にあつたのですが、そのビルは解体されてしまいました。アムステルダムではほかの都市のように、インドアのスケートパークがありませんでした。これは、市民や若者がイニシアティブを取って、このようなものが提供されるべきだと政治意識を植え付けた、とてもいい例だと思います。

これらのランプなどは全部、若者たちが作ったものです。今やとても有名なスケートパークになりました。

これはアウトドアレストランです(19)。生活保護を受けていた失業中の母親が二人いたのですが、この人たちは代替資材、廃棄物などを使って建物を造る技能を持っていたので、彼女たちにビジネスをやってみたらどうかとスペースを提供しました。彼女たちがこの建物を造ったのです。

低所得者に対して、高収益の市場開発ではないような場所を提供することができるようにしています。そうすることによって若者やビジネスを始めたいと思っている人たちがその機会を得ることが

できるように今取り組んでいるのです。これはそのいい例だと思います。

これが私たちが設立している持続可能なエネルギーの会社です(20)。倉庫の中にはヒートポンプが導入されています。植物油を使う発電機も倉庫内で使っております。

この写真はフォトショップで作ったものですが、実をいうとクレーンに風力発電機を付ける許可をつい先日受けることができました。発電した電気でヒートポンプを使ったり、倉庫内でエネルギーを供給することができるようになります。

こういうものはすべて、アーティストやエンジニアによって設計されているのです。私たちは、アーティストだけではありません。職人であったり、エンジニアであったり、特殊技能を持っていたり、みんなこのようなプロジェクトに参加してくれるのです。これはこういう人たちの集まりだからこそできたのです。民間市民のイニシアティブのいい例です。

これは燃料ステーションです(21)。1日24時間、車にバイオ燃料を入れたり、電気供給をしたりすることができます。この後ろの方ですけれども、ここは人が新しいエネルギーを得ることができるようなスペースです。瞑想の場でもあります。燃料の供給とともに音が流れるようになっておりますので、リラクセスしながら景色を楽しめます。これをデザインしたのも私たちのところにいる二人のアーティストでした。

これは資金調達の例を示したものです(22)。複数の資金提供機関などに助成金を申し込みました。主な後援機関は、スケートパークの建設資金を提供してくれたアムステルダム市の青年省や、またインフラや構造体の資金を提供してくれたプリーディングスペース基金、そしてわれわれにオランダで最も革新的なプロジェクトとして賞金を提供してくれた国の政府です。とても複雑なプロジェクトで、全く新しい試みだったということもあって、賞金を得ることができました。

私たち独自の投資額も、200人のアーティストで現在では5億3600万円になります。これらの投資以外に、アーティストは年間総額で約6700万円の賃料を払っております。ただ、まだ全体の50%しか開発されていませんので、今後アーティストの数が増えるとアーティストによる資金貢献もより多くなっていきます。

文化活動の例を、幾つかお見せしたいと思います。Over IJ Festivalという、site specific theatre型のオランダ特有の演劇があります。

またRobodock Festivalというものもあります。世界中から600人のアーティストを招いて開催する、アートとテクノロジーのフェスティバルです。アーティストたちは現場にテントなどを張り、キャンプをしながら、フェスティバルの作業を行います。そして1週間にわたり見事なパフォーマンスや火などを使った豪華な舞台なども楽しむことができるようになっております。これはとても有名なお祭りです。

Test-Portalはとても試験的なマルチメディア・ビデオ・アーティ



20



21



22



23

スト・フェスティバルで、これも国際的な試みです。3年に1回しか開催することができませんが、質はとても高いです。ただ、見に来る人はさほど多くありません。でも人が来なくても、重要なことに変わりはありません。

NDSM Underseasは、私が今、若者を教えているプロジェクトで、ノースの方に幾つかヒップホップフェスティバルを開催していますし、隣人の住民を対象に、のみの市や闇市も開催しております。また1年に1～2回すべてのスタジオを公開して、一般市民の方にはオープンスタジオをやっておりますし、商業目的のイベントも開催しております。

それから、MTVやClub Filthのパーティーもやっております。Club Filthはとてもアバンギャルドな商業目的のお祭りです。ほかにも展示会やコンサートなども開催しております、これらの文化活動をやることで、多くの人を引き付けます。1年間で25万人のビジターが来るのです。

この子は日本人でホッピーちゃんです(23)<sup>※3</sup>。2005年に開催したTest-Portalのmanifestationに来てくれました。

オペラ公演もやっております。隣に使っていない大きな倉庫があり、それを使うことができますので、ここでクラシックコンサートや、オペラ公演をやっております。

私たちがここを興味深い場所にしたわけですが、今、大手企業が入り込んできました。アムステルダム市も国の政府も私たちを支援してくれていますが、ローカルカウンスルが、NDSMの倉庫を事業会社に売却しようとしているのです。私たちはこれにとってもショックを受けました。たくさんものをここで作り出してきたからです。

従って、私たちはパートナーを探し、倉庫を私たちが買い取ろうとしております。パートナーを見つけることができましたので、多分成功すると思います。住宅協会とのパートナーシップで、この4月1日に共に契約にサインします。しかし住宅協会は私たちに、2年の間にほかのパートナーなどを探し、私たちだけで買い取ることを求めています。住宅協会の保有している部分はその時点で、私たちに売却することになります。ですから、この倉庫の所有形態は常に非営利目的となり、公共の場であり続けます。

それでは、ここで短いビデオをお見せしたいと思います。

ビデオ上映「No-land」<sup>※4</sup>

#### 脚注

※1 Silo Theatre <http://silotheater.panvilla.com/>

※2 NDSM Warf <http://www.ndsm.nl/>

※3 3/11現在、1ユーロ≒157円として7億8500万円相当

※4 日本のポップバンド「キリロラ」のボーカリスト：ホッピー神山 <http://www.kirilola.com/>

※5 Patricia de Ruijter 「No-Land」

## プレゼンテーション「横浜市におけるクリエイティブシティの取組」

川口良一（横浜市開港150周年・創造都市事業本部長）

今、ビデオがずっと流れていましたので、クリエイティブシティの概要については既に皆さんにご紹介しているかと思っております。時間がありませんので、そういう意味で、ごく簡単にご説明させていただきたいと思っております。

先ほどのビデオにもあったかもしれませんが、クリエイティブシティ・ヨコハマの目標ということで、ここにありますように、当たり前のことかもしれませんが、アーティスト、クリエイターが住みたくなる創造環境の実現や創造産業集積による経済の活性化、魅力ある地域資源の活用、市民が主導する文化芸術創造都市づくりというようなことを目標に掲げまして、大体4年前から本格的にクリエイティブシティ・ヨコハマという施策を始めています。

このエリアですが(01)、まず六つのエリアに分かれております。山下ふ頭は、もともと倉庫が連担してある所です。その倉庫は昭和30年代ぐらいに造られた一般的な倉庫で、コンテナ時代になって、港としての機能はほぼ終わっております。ただし、今は中国の北京オリンピックや上海万博などで海運の景気が非常に良くなっておりまして、まだまだこのふ頭は使われており、むしろ船が接岸するというよりは、陸送でいろいろな所に運ばれる一時保管場所として機能しておりまして、なかなか転換が進んでいません。先ほどのアムステルダムの中でいろいろな倉庫を改装していろいろなことに使われているわけですが、われわれとしてもそういう形で転換ができないかということで検討しています。

次の象の鼻・大さん橋地区ですが、ここを大さん橋・日本大通り地区と呼んでおります。象の鼻の所は横浜港の発祥の地で、象の鼻の再整備を開港150周年の目玉の事業として今一生懸命しているところです。そこから日本大通り、ZAIMというのがありますが、そこにかけて日本大通りを整備しておりまして、日本大通りの横浜公園側から港までのピスタを確保しようということをしております。

次の新港・馬車道と書いてありますが、このエリアについては、東京藝術大学やBankART NYK、BankART 1929など、いろいろ私どもが誘致したり作ったりした施設が集中しているところです。

みなとみらい21クイーン軸は、みなとみらいの中で最初に開発が

スタートした所で、ほぼ出来上がっているエリアです。この中でのにぎわいづくりをしています。

みなとみらい21キング軸については、これからの開発ですが、これの突端にあります20街区を映像文化の拠点と位置付けておりまして、この軸線の開発をしております。

それから、ヨコハマポートサイドはほとんど開発が終わったところですが。この中にも文化拠点を作れないかということで、まだ空いた土地がありまして、そこを検討している状況です。

それに加えまして、上の方にありますが、桜木町・野毛エリアということで、桜木町の駅や野毛から黄金町という少し離れた所ですが、その一帯を桜木町・野毛エリアということで、ここはこの赤字で書いてあるところとはまた別に、日本大通りや馬車道に加えて、桜木町・野毛エリアということで、急な坂スタジオや、桜木町の駅舎の隣にあります創造空間9001という施設がありますが、こういうものを整備しているのが現状です。

それらの地図を今見てもらったわけですが、それを政策別に分けると、この五つの政策になります。ナショナルアートパーク構想、創造界限、映像文化都市、横浜トリエンナーレ、創造の担い手育成という五つです。

まず、ナショナルアートパーク構想についてですが、これは国立公園を造るわけではなく、ナショナルというのは、このプロジェクトを大きな国家的なプロジェクトぐらいに評価してもらいたいという意味で付けておりまして、アートによるまちづくりを目指しています。

その中で、これは最近われわれがやろうとしていることをご紹介するのですが、中央に小さい丸で企業、各種団体、行政と書いてあります。この3者が協働で創造都市横浜推進協議会というものを作りました。これは、横浜のナショナルアートパークのエリアのまちづくりを、行政だけではなくて民間の方と一緒にやっていこうということです。それを支えるということで、左にあります企業ネットワークを2月早々に立ち上げました。これは企業の中でも文化や芸術活動の支援に積極的な横浜市内でいろいろな活動をしている企業にお集まりいただき、企業連携をしております。また、右側には行政とあります。この企業、協議会、行政の3者が協力し合って、ナショナルアートパークエリアの文化事業、産業の育成をしていこうということです。

次の創造界限ですが、これはBankART NYKが代表するようなアーティストの芸術活動を支援していくエリアとしていこうということです。先ほど言いましたように日本大通り、馬車道、桜木町・野毛地区それぞれに施設を配置して、その中でNPOを中心にアーティストの支援活動をしております。

その中で今年度始めた新しい試みの一つとして、アーツコミッション・ヨコハマというものを作っています。われわれはよくフィルムコミッションという活動を聞きますが、フィルムコミッションというのは、ワンストップで映画づくりを支援する組織です。われわれは、



アーツコミッションということで、ワンストップでアーティスト、市民の方々の支援をする相談窓口、いろいろなものを紹介する窓口、育成のお手伝いをしていこうという中間支援組織を作りました。

映像文化都市につきましては、藝大を代表するような研究施設、教育機関、映像産業を集積しようということで、ここにありますように、イベントとしては「ヨコハマEIZONE」などの最先端の映像発信、いろいろな映画祭の支援、藝大の誘致などしております。藝大については、既に映画専攻科とメディア映像専攻科が開設されていて、今年4月に、これも国立の大学では初めてになります、アニメーションの専攻科を開設することになっております。その三つのコースができることによって、映像研究科の体系が出来上がるという形になります。

横浜トリエンナーレですが、これは、左側が2001年、中央と右側が2005年の絵ですが、日本最大のコンテンポラリーアートの美術展ということで、これはかなり海外に創造都市を宣伝する一つの大きな手段になっています。今回は3回目ですが、2008年9月13日～11月30日に、新港地区の3カ所の会場で行う予定です。そのほかにも関連のイベントを数多くやっていきたいと思っております。横浜トリエンナーレの特徴は、やはり市民と一体でこのトリエンナーレを作り上げていくということで、常設の事務所もサポートの事務所も持っております、そういう中でサポーターと一緒にトリエンナーレを作っていくという活動を既に始めています。

あとは創造の担い手育成ということで、横浜市として若手のアーティスト、それから学校などの教育機関へのアーティストの派遣といったことを通じて、いろいろな意味で、文化、芸術に直接触れてもらう。そういうことを通じて、若手のアーティストや子供たちの音楽や美術に対するいろいろな支援をしております。その中では、今回の創造都市交流、こういうところでも中間支援団体の支援もやっておりますし、横浜オペラ未来プロジェクトと書いてありますが、ここでは、若手の歌手とオーケストラのメンバーを選び、発表の機会を与えるという形にしています。それから、横浜音楽空間では、ストリートミュージシャンの支援という意味で、発表の場を提供しています。

創造都市交流には、ここにありますように、2006年に、先ほど司会の藁谷さんからありましたが、ロンドン、シンガポール、そして2005年にはEUの各国との交流といったことをしています。こういう形で、簡単ですが、創造都市ということでここにありますように五つのプロジェクトを進めているのが横浜市の現状です。以上です。ありがとうございました。

## パネル・ディスカッション「オランダ・モデルに学ぶ日本モデルの構築」

### パネリスト

- ・ロバート・マライニセン(CCAA プログラム・マネジャー)
- ・エヴァ・デ・クラーク(NDSM Wharf クリエイティブ・プロジェクト・ディベロッパー)
- ・後藤和子(埼玉大学教授)
- ・川口良一(横浜市開港150周年・創造都市事業本部長)

モデレーター：菅野幸子(国際交流基金)

(菅野) それでは、これから1時間しかありませんので、早速パネル・ディスカッションに入りたいと思います。実は2003年に私たちはアムステルダムを訪問したことがあります。市の西側の方にウェスターガスパブリックという英国の元ガス工場があり、再開の途中だったのですが、そこを会場に「Creativity and the City」というテーマの国際会議が開かれ、参加したのです。そのとき、チャールズ・ランドリーやリチャード・フロリダ、先ほどロバートさんのお話にも出てきましたが、そういう方々と世界中で創造都市になろうとして取り組んでおられる方々が100名以上集まって非常に熱いディスカッションを交わしたことがあります。それ以降、アムステルダム市でも、創造都市に積極的に取り組まれてきたのだと思います。アムステルダム市だけでなく、オランダ全体においても、会議の波及効果は非常に大きかったのではないかと考えられます。ここにおられる後藤先生も一緒に会議に参加されていたのですが、私たち日本からの参加者にとっても非常に刺激的な国際会議になりました。

こういった動きがオランダの中であり、また、オランダという国が、アイデアと知恵を使って、モノを作るという製造業だけではない産業を作ってこなければならなかったという歴史を踏まえて、創造産業振興政策が今推進されているのではないかと思います。

川口部長から横浜の事例をいただきましたので、エヴァさん、ロバートさんには、短い横浜滞在の間、積極的にいろいろな団体の方々と会っておられると思いますのでそれぞれ簡潔にコメントなり感想をいただければと思います。

では、ロバートさんからお願いいたします。

(マライニセン) 私は、夏にツーリストとして一日こちらにおじゃましました。普通の観光客がするように中華街に行ったりして、非常に気に入りました。大さん橋の国際客船ターミナルに行きまして、世界でも最も素晴らしいものの一つだと思いました。それから本当の横浜を今回3日間で見せていただいています。まさにふるさとのような感じがしています。人々が非常に親切にしてくださいまし、日本人の方のお名前をすべて覚えるのは難しいので不可能なのですが、レストランの人たちも親切でした。

私の印象ですが、プロジェクトは多かれ少なかれアムステルダムでやろうとしていることと似通っていると思います。戦略、目標、そしてアートスペース。アムステルダムには横浜ほど良いアートスペースはないのですが、同じことをアムステルダムでもやっていきたいと思っています。手掛けていきたいと思いますが、3日間でどのようにして皆さんがこういうことをやっていらっしゃるのかを理解する

のは難しいので、適切な目標を掲げていってやることは理解できたのですが、実際にどのように実施していらっしゃるのかを知りたいと思います。同じことを違ったやり方でやっているのだと思います。戦略の成否は、そのやり方が決めると思いますので、実際にやり方についてもっと知りたいと思っています。それが良いきっかけになると思います。

(菅野) ありがとうございます。次に、エヴァさん、お願いします。

(デ・クラーク) 私も本当にわくわくする時間を横浜で過ごすことができました。そして、市がアートスペースなどにすごく力を入れていることを素晴らしいと思いました。アムステルダムでは、ロバートさんが言いましたように、展示用の場所はあまりたくさんありません。ただ、街にとってこれは本当に重要なものなので、こういうものを見ることができて本当にわくわくしました。市がこれを可能にしていることが本当に素晴らしいと思いました。幾つかのプロジェクトを横浜で見に行ったのですが、一つ一つ本当にユニークなものでしたが、二つに関してとても感銘を受けましたので、それを述べたいと思います。

一つはFunnybeelによる寿町におけるプロジェクトと二つ目が黄金町のプロジェクトです。私は、本当に両方の地域にアーティストとして暮らすことが想像できます。その地域、それから提供されているスペースは、本当に私にとって魅力的なものでした。ここでパイオニアとしていろいろなことをやっていきたい、いろんな人と会ってみたいと感じました。アムステルダムは本当にスペースに限りがありますので、本当に横浜に引っ越してきたいと思うほどでした。

(菅野) ぜひ横浜にも何度も何度も来ていただきたいと思います。居を移していただいても、横浜の方は皆さん多分ウェルカムだと思います。

次に、オランダでも研究をされ、ランドリーの『創造的都市』を訳された後藤先生に、日本とオランダの事例を両方ご存じですので、その比較あるいはコメントをお願いしたいと思います。

(後藤) 私は、今日ここにいらっしゃる皆さんには大変ご恩があります。と申しますのは、まず、先ほど菅野さんがおっしゃいましたが、2003年にCreativity and the Cityという国際会議がアムステルダムであったときに、まず参加させていただきました。その後、2004～2005年にかけて、エラスムス大学ロッテルダムに、研究の目的で客

員教授として滞在したのです。そのときに国際交流基金のフェロシップとして滞在させていただいたということで、国際交流基金にもご恩があります。

そのときに、2004年4月の終わりか5月の初めだったと思うのですが、イギリスのブライトンでクリエイティブクラスターという会議があったときに、ロバートさんに初めてお目にかかって、その後何度かアムステルダムでクリエイティブシティの政策についてインタビューさせていただいたことがあります。

お隣にいらっしゃるエヴァさんの所にも何度も私は見に行つたのですが、エヴァさんは大変お忙しくて一度もお目にかかれなかったのですが、2003年ぐらいからずっと、経過を何度か見せていただいています。

オランダのプレゼンテーションと横浜のプレゼンテーションを聞かれて、皆さん、非常に違う、びっくりされたというか、すごく違うなという印象を持たれた方もいらっしゃると思うのですが、何がそんなに違うか、私が感じているところをお話して、最初は問題提起をさせていただければと思います。

まず、ロバートさんがオランダのメンタリティは非常に自由でオープンだとおっしゃいました。やはりそこからスタートされているのですよね。クリエイティブシティがどのようにクリエイティブになるかというときに、オランダというのはとても自由でオープンなメンタリティを持っているから、そこからスタートしてクリエイティブになろうという発想、つまりものすごくコンセプトualなところから発想されてスタートしていると思うのです。

日本の場合は、まずそこがなくて、どうしたらいいかというようなところで、そこから始まってしまうのです。そこで、川口さんにお聞きしたいのですが、横浜のメンタリティをどのようにとらえていらして、どういうクリエイティブな都市になろうとしていらっしゃるかというのを後で教えていただければと思います。

それから横浜に3日間滞在して、黄金町などは非常にエキサイティングだったとエヴァさんはおっしゃっていますが、横浜のメンタリティをどのようにお二人がお感じになったかお聞かせ願えると、その見方の違いが分かって面白いかなというのが第一点です。

もう一つは、エヴァさんのプレゼンで非常に印象的だったのは、アーティストのイニシアティブということをおっしゃって、200人もアーティストを集めて、ものすごいイニシアティブを発揮して造船所を全部作り替えてしまうという大プロジェクトをやっているということ。この会場にいらしている丸ノ内の三菱地所の知り合いの方が「非常にアグレッシブだね」とおっしゃっていたのですが、どうしてアーティストがそんなにイニシアティブを取れるのか。日本ではちょっと考えられないというか、アーティストにイニシアティブはあるのですが、まだまだ弱いのです。一体どこからオランダのアーティストのイニシアティブが来ているのかというのを聞かせ願えばと。まずそのあたりから話を始めたいと思います。

(菅野) 後藤先生、ありがとうございました。良いポイントを指摘していただきました。先ほど最初に見方の違いということがありましたが、それでは、川口さんからオランダの事例をご覧になってどのように思われたか。プラス、横浜との立ち位置の違いででしょうか。そういったことも含めてどのように感じられたかお聞かせいただけますか。

(川口) 昨日、お二人にお会いして少し話をしたのですが、そのときに、アムステルダムの例はボトムアップな展開をしていると聞いたところでは、お二人が言われる中では、横浜の政策はトップダウン型の政策ではないかと言われました。私はその言い方が意外だったのですが、そういう形でとらえることもできるのかなと思います。

それは、やはり横浜は、われわれというか行政側が創造都市というものを横浜市政策として位置付けているからです。その基本的な、メンタリティかどうか分かりませんが、底流にあるものは、これからの都市というのは、うちの市長などは非成長・非拡大の時代ではないと言っているのですが、そういう時代認識を持つべきではないかということがあります。

それは何かというと、この都心の中で、もちろんMM地区とか北仲地区ではスクラップ・アンド・ビルドということが行われているのですが、関内地区を周辺としたこの創造界隈の中では、いたずらなスクラップ・アンド・ビルドではなくて、今の現状を容認して、その中でどういうまちづくりをしていくかということが非常に重要ではないかと。

そういう中で、どのような政策が有効であるか。サステナブルな都市政策をどのように展開していくかという中で、この創造都市というのが出てきた。もちろんそれには、EU諸国とか、そういう事例があって、そういう中で成功例を見ながらこういうことをしてきたということになっていくと思います。そういう意味では、確かにアーティストやNPOの方々から、ぜひこういう形で、ここに住みたいとか、住み込んでいくという形のスタートではないという意味では少し違うのかなと思いました。

そのように言われたので、確かにそういう意味では政策的なスタートが先行しているかなと。日本の状況というのは、そういう面が非常にある。例えばアーティストという方々がいろいろな社会性とか運動を通じて常に社会に向かって何かを訴えていくような状況ではなかなかないのかなと思っておりまして、そういうところから、アムステルダムのようなボトムアップ型の集積はなかなか見だせてはこれなかったのかなという感じはします。

(菅野) ありがとうございます。後藤先生が2点目として、アーティストのイニシアティブ、特にエヴァさんがやっていたらNDSMですね、私も一度伺ったことがあります。圧倒的な行動力と圧倒的な広さ、圧倒的なパワーに衝撃を覚えて帰ってきました。先ほどエヴァさんがおっしゃったように、200人のアーティストがネットワークを組んで、お金を出し合って、もちろんその中には市からファンドを得たりということがありますが、なぜそれが可能だったのか。それが日本においては、先ほど川口さんがおっしゃったように、アーティストと社会とのかかわりが若干違うのではないかとすることも含めて、オランダにおいてアーティストたちがイニシアティブを取って行く活動について、また、それとアーティストがどのように社会と関わっているかを含めて、エヴァさんからお話を伺いたいと思います。

もう一つ、先ほどエヴァさんのプレゼンテーションの中に「スクワツティング」という言葉が出てきたと思います。会場におられる方も、そのスクワツティングという意味を皆さんご存知でしょうか？ある

一定期間そこに住むことによって、居住権なりの権利が生じる法的なシステムがあるようです。

この点につきましては、私自身も専門家ではないので、後で後藤先生に補足していただきたいのですが、日本とオランダの社会の仕組みも違うところがありますので、その時々で補いながら議論を進めていきたいと思えます。

では、まずエヴァさん。アーティスト200人がなぜ集まって、このプロジェクトを始めたのか。その点をもう少し詳しく聞かせていただけますか。

(テ・クラーク) 1980年代から、このスクワッティングについては伝統がありました。そしてアーティスト自身が自分たちでイニシアティブを取って、これらのビルを自分たちが改装していました。

実際入居したときにはもう汚れていて、ごみもたくさんで、施設も全くないということで、利用にはふさわしくありませんでした。スクワットされたビルに10~15年、スクワッティングしている中で、われわれ自身がビルに投資し、清掃し、ボードを立て、トイレを直しました。

こうした場合、当初インキュベーション期間が必要です。人が出入りして、5年、6年、7年かかって素晴らしいコミュニティ、あるいはグループが出来上がってきます。そしてビルもちゃんと使えるようになります。もちろんうまくいかないものも少数ありますが、それ以外はうまくいっています。

そして、アートのイニシアティブ、また工芸関係者、あるいは自転車を修理するような人、零細企業の人たちが、こういった場所を自分たちのビジネスにとってふさわしいと思うようになり、ある期間をかけて投資するようになりました。これはアーティストの運動の一部です。すべてのアーティストがかかわるわけではありません。こんな大変なことはごめんだと、はじめからきれいなスペースで仕事をしたいという人もいますが、これはある種の興味深い運動のようなものだと思うのです。というのは、特に実験的なグループの場合、また国際的なアーティスト集団の場合、こういったスクワットされた建物の中で、不法利用しているのですが、警察は退去させることができない。オランダはおかしな国で、おかしな規則があるものですから、こういった制度化されている場合には起こり得ないような面白いことがたくさん起こりました。また、理念として、このCity of Standing Wallsですが、エンドユーザーが時間をかけてこの建物に対して投資し、その投資が価値を高めていく。ビルが価値を高めていくことになりました。

横浜にはこのような強力なアート・イニシアティブはないとおっしゃいましたが、そもそも横浜市には文化政策があります。アムステルダムにはそういった政策がなかったから、こういったことが始まったのではないかと思います。

(菅野) ありがとうございます。アムステルダム市にはそういう政策がなかったから始まったとおっしゃっていますが、ロバートさん、今のエヴァさんのコメントに関して、市として、アーティストの活動に関しては非常にエンカレッジされているところだとは思いますが、スクワッティングやそういう活動に対して、どのように考えておられるのでしょうか。

(マライニセン) 私がアムステルダム市で働き始めた理由の一つは、私は個人的に文化的政策に不足があったと思ったからです。新しい年代にふさわしいものがなかった。ですから、ボトムアップという形で何かやってみたかったわけです。そして、政策を作ってくれと私は頼まれました。

ほかの人と一緒にまずやったことの一つは、アムステルダムの新しい文化のビジョンを描くというものでした。さまざまな部署、経済部署やスペース部署などと一緒にやりました。アムステルダムの文化の将来に関する絵を描いていったというわけです。これは文化政策として新しいアプローチを作り出したわけですが、このアートスペースに関しての取り組みは、都市開発部の日々の作業の一部となっています。ですから、これはただ単に文化担当省だけの作業ではないわけです。

横浜市とアムステルダム市の違いについてですが、これはかなり大きな差、ショッキングな差がある場合もあるかもしれません。トップダウンの方がボトムアップよりも良い、もしくはボトムアップの方がトップダウンよりも良いというわけではないと思います。市によっては、だんだんものが成長していく、ボトムアップに成長させていくこともありますし、もしくは新しい図書館やコンサートホールを作る場合でしたら、これはもちろんトップダウンです。そうでなければ、実現することができないわけです。ですから、両方のアプローチをうまく使い合わせていく必要があるのではないかと思います。

その差は、歴史から来るのではないかと思います。19世紀、政治家は政治がアーティストの生活に関与するべきではないと決めました。ですから、アーティストやクリエイティブの方々が政治家に求めるものに応えるという役割が政策にあったわけです。ですから、そのような政治が続いているわけです。政治家の多くは、アムステルダムがこれをやるべきだと、誰かがこれを始めたといっても絶対怒らないでしょう。適切なボトムアップのイニシアティブを選んで、目標を達成するために取り組まなければならないわけです。ですから、市長が決めたことはあくまでも議論の始まりだという言い方もあるわけです。

(菅野) ありがとうございます。確かに、ボトムアップとトップダウン、ある意味で両方のベクトルが動かないと一つの都市は伸びていかない、活性化していかないのではないかと思います。先ほど都市間競争が激しくなっているとおっしゃっていましたが、クリエイティブシティという、ある種ブランディングとなり世界中に広がりつつあるのではないかと思います。ただし、本当のクリエイティブシティというのは、そこの中で、アーティストだけでなく、一人一人の市民が、それぞれの個性を伸ばし、自分の魅力を高めていく、能力を高めていくことをいかに実現していくかということが、その本質の一つだろうと思うのです。

そして、行政、市民、アーティスト、さまざまな分野のプロフェッショナルの人たちの力が総合的に集まったときに、本当のクリエイティブシティが実現できるのだろうと思います。その意味では、どちらかが、あるいは両方の力がなければ実現できないとおっしゃるのもっともだと思います。

それでは、後藤先生、これに対してまたコメントをいただけますでしょうか。

(後藤)まず、不法占拠とスクワッティングですが、間違っていたらロバートさんとエヴァさんに訂正していただきたいのですが、オランダでは空いた家があったり、空いたビルディングがあったりしたときに、誰かがベッドを持ち込んで生活を始めたら誰も追い出すことはできないという社会的な慣習があると学習しました。それでよろしいですか。いいみたいです。

ということで、警察であっても立ち退きを要求することはできないということになっていますから、別にエヴァさんのところだけではなくて、いろんな所にアーティストが住み着いて活動している場所がほかにもたくさんあります。

さて、それで話をどのように進めていこうかと思ったのですが、先ほどエヴァさんは、アムステルダム市というか、行政が何もしていなかったから、アーティストがイニシアティブを取ったとおっしゃっていましたが、実はオランダはアーティストの支援ということではものすごくいろんなことをやっております。

それはロバートさんの話の中にも少し出てきたのですが、例えば失業対策の一部として、違っていたら後で訂正していただきたいのですが、アーティストに10年間お給料を毎月1000ユーロでよかったですでしょうか、生活保障をして、48カ月は自由に作品を創作していい。10年間ですよ。そのようなことをしていたり、あとはアーティストが創作する場所に対する家賃補助はあちこちでやっています。自治体もやっているし、国もやっているし、その期間がやはり10年だったと思います。大抵10年で家賃の半額を国なら国が家主に払うのですが、それは10年分一括前払いするので、家主は銀行にそのお金を預けると利子が付くということで、決して損をしないような仕組みになっているとお聞きしました。

そういう長い時間、期間でのアーティストの支援みたいなことが根底にあって、プリーディング・プレースというアイデアも出てきて、今アムステルダム市内1000カ所とロバートさんはおっしゃっていましたが、これはアムステルダム市の都市開発部局が都市の再開発をした開発利益を、プリーディング・プレースのお金に回しているということで、1000カ所ですね。

だから、こういうベーシックなアーティストに対する支援が根底にあるのだということで、日本ではなかなかこういう政策はしていませんよね。プロジェクトに対しては支援するけれども、10年もの間アーティストを支援し続けることは発想がなくて、それはどうかということかと、アーティストに投資するのだとロバートさんはおっしゃっていたと思うのです。ですから、アーティストに投資することがとても意味があることだと。ですが、日本の場合はアーティストを支援することは投資だとは思ってなくて、何か浪費してしまうというか、そのように市の全体予算の中で合意を得るのが難しいというのが、どこの市でも、あるいは国のレベルでもそうだと思います。

それで、ロバートさんにお聞きしたいのですが、どうしてオランダではアーティストに投資するのだということが、財政当局にも受け入れられて、議会の議員さんも賛成するのでしょうか。

(菅野)それに加えて、先ほど銀行が文化ローンを持っている。文化に対してローンをするというシステムを持っているとおっしゃっていたのですが、それも含めて、普通、日本の場合、アーティストの方、あるいはそういった芸術活動に対して銀行が融資するというのは、

最近幾つかのNPOが実現されていますが、なかなかそこまで意識がいていないと思うのです。そういったことも含めて体制的な背景について、ロバートさん、ご紹介いただけますでしょうか。

(マライニセン)多くの異なった理由があり、さらにそれらは変化してきています。まず、われわれがこういったことを始めたのは、文明の進んだ国はアーティストを支援すべきだと考えたからです。それ以外の理由は何もありません。アーティストは重要だと考えていますし、またアーティストになろうと思った場合には、往々にして収入が少なく、非常に大変です。ですので、文化的な面からアーティストを支援する理由があります。

もう一つ、経済的な理由もあります。というのは、アムステルダムにおいては、労働人口の7%はクリエイティブインダストリーに従事しています。ですので、7%というのは割合としても相当大きいですし、世界中で最も急成長を遂げている産業です。ですので、クリエイティブシティの場合には、クリエイティブインダストリーに従事している労働人口の割合が10%ということもあるでしょう。また、アムステルダムの場合、クリエイティブインダストリーの規模が金融産業と同等ぐらいの大きさになっています。ですので、そういった意味合いの理由もあります。

三つ目は、クリエイティブな人々がまさに市をほかの人から見て魅力的なものにするのです。新しいタイプのリテールスペース、あるいはレストラン、新しいタイプのいろんなものが出てきますので、その都市で働きたいと思う人たちを引き付ける魅力になります。また、金融の中心地としても、誰も退屈な所に住みたいとは思いませんので、いろいろな理由があると思います。

そういった理由があいまっていますが、ほかにも理由があります。もし、アーティストとエンジニア、例としてエヴァが発表した中にもありましたが、そういった人たちが一緒になると、新しいやり方で持続可能なさまざまな法則を見いだすことができます。ですので、違うセクターでも、よりクリエイティブな、より良いアイデアを創出することができます。従って、クリエイティブな起業家たちを支援すべき理由はいろいろあります。

それから、プレゼンでも言及したのですが、ほとんどのアーティストは、自分たちの収入で自活できるようになるまでに、学校を卒業してから十分な名声を得て生計を立てられるようになるまでに、より期間が必要だということです。マーケティングの学校を卒業して、オフィスで働き始める場合より長いインキュベーション期間が必要です。だからこそ、その期間に対してわれわれが投資するので。というのは、こういったクリエイティブな人たちがいなくなってしまうと、都市自身がクリエイティブでなくなってしまうからです。いろいろな理由があります。

(菅野)ありがとうございます。文化が進んだ国では、アーティストあるいは芸術を支援するのは当たり前だと言われました。日本の中でも創造都市ということが言われているのですが、そのために予算を取り、制度を作るというところが、なかなかうまく進んでいない場合の方が今のところ多いのが現状ではないでしょうか。まず、どうして文化に投資をするのかというアカウンタビリティ、説明がなかなかしにくい部分があるかと思うのですが、横浜市の場合もいろいろ政

策を取られていると思います。先ほど、ナショナルアートパーク構想といったお話をいただきましたが、制度的な面として、アーティスト支援あるいはクリエイター支援でどんなことをされているのか、教えていただけますか。

(川口) アーティストを直接お金で支援するという点については、私もも何回か議論をしています。ニューヨークのNPOなどは、年7000ドルを20年間、アーティストに支援し続けているという事例もあります。そういう期限を切らないで支援をしているところもありますし、今、例にありましたように10年間とか5年間という形で支援をしているところもあります。

われわれも具体的にそういう形で支援をできないかという検討もしたことがあります。やろうと思えばできると思うのですが、本当にそれがアーティストにとって良いことなのかということと、日本のいろんな状況の中で、例えば社会保障の問題とか、そういう他の制度との関係とか、そういうところで、単純にそういう形で、言い方は悪いですが、お金を渡すという助成の仕方が果たして良いのかどうかということは、ちょっと懸案であるというか、なかなか日本の中ではすんなりとできないことなのかと思っています。

そういうこともありまして、今やろうとして、実際に制度としてやっているのは、アーティストがアトリエやオフィスを設けるときに、その初期費用を助成するという形で、家賃助成や設備投資に対する助成をしています。

それから、例えば、黄金町、日の出町のエリアには、なるべくいろんな人に住んでもらいたいということもありますので、実際に部屋を借りてそこに非常に安い値段でアーティストに住んでもらうということも始めていまして、そういう形で、具体的な支援としては家賃助成になるのかもしれませんが、そういう形や、初期費用の助成をしています。

(菅野) 金銭的な支援だけではなくて、情報提供やマッチメイキングといった支援も非常に大切だと思います。横浜市ではアーツコミッションを立ち上げられていますが、実際にどこかのほかのパートナー、企業の方とのマッチメイキングといったことを考えて作られているのでしょうか。

(川口) 一つは、われわれは芸術不動産といっていますが、アーティストにいろんなスタジオやオフィスなど住む所の情報を提供しています。あとは、民間のビルを安く貸していただけたところがあれば、そういうビルをまとめて借りて、そこをアーティストや建築事務所の人たちに提供しています。その一つとして、アーツコミッションの中にそういう窓口を作る。

それから、発表の場の提供ということで、横浜市内の施設の紹介とか、そういう形で発表の際の支援をしています。アーティストは、発表をすることが大きな目的の一つでもありますので、発表の中身について助成するという点で、これは委員会を作って、その委員会で10から12~13のプログラムを年間で助成しているという形で支援しています。

また、そのほかにも、幾つか新しい制度を考えてはいますが、基本的には実際にアーティストが行動することについて支援していくと

いうのを基本的な考え方にしていこうかと思っています。

(菅野) そうしますと、エヴァさんたちのようなアーティストたちがこれからもっと力をつけていくための支援とか、その結果としてのアウトプットに対してのエンカレッジであるとか、そういったことをこれから目指していこうということですか。

(川口) 基本的にはそのように思っています。

(菅野) 例えばそういった場合、支援に対して、今度は評価ということで、例えば公共のお金を投資する場合であれば、それに対するきちんとした説明責任が必要になると思うのです。また、経済的な効果だけではなく、その地域が活性化したとか、目に見えない効果もいろいろあると思います。

先ほど文化ファンドのお話が出ましたが、ファンドについて少し討議できればと思います。後藤先生、先日、ヨーロツパに調査にいかれたとのことですので、補足いただけますでしょうか。

(後藤) 文化ファンドというのは、ヨーロツパの中でもこういう仕組みを作ったのは今のところオランダだけだと思います。

ここ2~3年でできた仕組みだと思うのですが、要するにいろいろな種類の文化施設やプロジェクトを集めて、リスクを分散させてファンドを作るのです。それを銀行が募集して、一般の人が投資をします。そうするとタックスクレジット(税額控除)が適用されるということで、自分の所得税が少し減税されるような仕組みになっているので、これはファンドと税制を組み合わせた仕組みです。

ほかにもオランダでは小さな企業がスタートアップするときのための投資をしてくれる人に対して減税をする Aunt Agaath という仕組みもあって、そういう仕組みをアーティストも使えるということで、ここ何年間かですが、そういう小さな企業のスタートアップと同時に、アーティストがそういうアントレプレナーになる、アントレプレナーとして自分で仕事を起こしていくようなことに対する支援は、オランダとしてはものすごくしているし、それがまたクリエイティブインダストリーを生んでいくということで、かなり力を入れていると私はお見受けしています。

(菅野) その文化ファンドを作っているというか、主体は市がやっているのですか。

(後藤) 銀行で文化ファンドを作って募集をしているのです。

(菅野) ファンドはどんな分野でも作れるのでしょうか? 例えば映画であるとか…。

(後藤) 映画はないと思いますが、例えばコンサートホールや美術館とか、小さなプロジェクトなどを混ぜて一つのファンドにして投資してもらうということだと思います。

(菅野) 金額の大きさとか、そういったことはいろいろ柔軟なのでしょうか。

(後藤) 人によってどれくらい投資するかというのは決めているのではないのでしょうか。10万円投資する人もいれば、100万円の人もいます。私の友人の税法研究者の女性も投資したと言っていました。

(菅野) 何か具体的なものはありますか。分かりやすい例のようなものは。文化ファンドは、日本でも映画のファンドとか、この前、別件でファンドに関するシンポジウムも手掛けたのですが、映画の方もいろいろな市民の方から、一般的に一口幾らと募ってファンドを作る。そこで収益が出たら、そのファンドに出資してくれた方にリターンをお返しするという仕組みもこれからの芸術支援の在り方としてあり得るのではないかと議論がありました。そのときはミュージックファンドと、映画のファンドと、演劇のファンドといった各分野の専門家の方が集まってやったのですが、そういうファンドの種類なのでしょうか。

(後藤) 映画のファンドとは全く違います。映画のファンドはヨーロッパでたくさん導入していますし、オランダでも一時導入したのですが、非常に無駄が多いというか、評判が悪くて廃止しました。今度の文化ファンドは、もう少し非営利的なところを集めてファンドにしています。投資する人から見ると、投資しても投資先が文化で非営利なのでリターンが少ないから、その分、個人所得税からの税額控除(タックスクレジット)を適用して、政府が投資を支援しようという仕組みになっていると思います。

(菅野) そうしますと、どこの銀行でも文化ファンドを扱っているのでしょうか。

(後藤) トゥリオドスバンク (Triodos Bank) というところで確か始めたと思うのですが、今幾つの銀行でやっているかまでは私は定かではありません。

(菅野) 分かりました。エヴァさんとロバートさん、ファンドに関しては、それを活用したことは、エヴァさんはありますか。文化ファンドという仕組みに関して。

(デ・クラーク) 私は個人的には使ったことはありません。私は自分のスタジオを作るのに、自分で働いてためたお金を使いましたし、母親から少しお金を貸してもらいました。だから、銀行には行っていません。ただ、私の隣人やアーティストは、文化ファンドを使ってスタジオの建設に充てたケースを聞いております。実際こういうを使っている人をたくさん知っています。

(菅野) ファンドという考え方は日本の中ではまだまだ新しいのではないかと思います。ファンドというと、どうしても経済的な、一般的な株といったところを考えがいきやすいのですが、芸術や文化、あとはセンターを作るといったことに対してファンドを作るというのはなかなか画期的なアイデアで、日本でもぜひそういったことをもっと始めてほしいとは思いますが、これからの芸術支援の在り方の一つとして、これからの課題になっていくのかな、そういう仕組みづくりもこれからできていけばいいのかなと思います。

それでは、それぞれに聞き足りないことやご発言されたいことがありましたら、おっしゃっていただけますか。その後で会場から幾つか質問をいただいていますので、それを投げて、その後、時間は短いのですが5分ほど、会場から直接質問を伺う時間を設けているそうなので、それに充てたいと思います。

では、後藤先生からお願いします。

(後藤) では、もう少し。せっかくオランダからいらしているのでもたくさん聞きたいと思うのですが、エヴァさんが先ほど古い造船所跡をデザインしていくときに、200人のアーティストを選んで、哲学者と建築家でデザインワークショップをしたとおっしゃっていました。日本だと哲学者がそういうところに出てきて活躍することはなかなかなくて、やはりこれもコンセプトチュアル・デザインみたいな、コンセプトチュアルをすごく大事にするということなのかと思ってお聞きしていたのです。

実際に哲学者の人たちは、そういう場でどういう役割を果たしているのか、コンセプトを作っていくとはどういうことなのかをもう少しお聞きしたいと思いました。

(菅野) エヴァさん、哲学者というのは具体的にどういう方たちなのでしょう。実際の哲学を考えて教えておられる方でしょうか。それとも、コンセプトを作るプランナー的な方、あるいはアイデアを考えられる方なのでしょう。

(デ・クラーク) 哲学者建築家、建築家哲学者といったらいいでしょうか。建築家だったのですが、非常に哲学的な人でした。この方は、高齢で、非常に経験が豊かで、さまざまな文化、社会、第三世界の国々など、世界中に建物、建築物のアーカイブを持っているような方です。この方に入っていたら、建築家として論理的な設計を都市計画と同様にやっていただく。そこには非常に多くのアーティストがおりましたので、設計も決めなければなりませんでしたが、建築許可も取らなければなりませんでした。そういった意味で、専門家としての建築家が必要でした。インフラ関連でもそうです。全部無料でやってくれました。ツアーとしてオランダ中のミュージアムなどを見て回って、昔のアーティスト、あるいは哲学者、例えばニューハウス<sup>※1</sup>、それから、ルロワ<sup>※2</sup>、ごみのアーティストなのですが、こういった人からインスピレーションを得るのは、デザインというプロセスにおいて非常に有用でした。

(菅野) 一つの大きなプロジェクトを遂行する、あるいは実行するのは、建築家やデザイナーだけではなくて、持続可能ということで、一度ですべてが実現されるわけではありませんから、何段階にも分けて継続して行っていく。そういったことも含めてそういったコンセプトを作ってくれる、助言者というか、そう存在なのでしょうね。ありがとうございます。

後藤先生、もう一点ございますか。

(後藤) せっかくですので、もう一つ。実は今日、ロバートさんはおっしゃいませんでしたが、私が2005年か2006年にお訪ねしたときに、アムステルダムでは、ロバートさんが文化の方ですが、経済を担当

していらっしゃる方と都市空間の方を担当していらっしゃる方で、1年ぐらいかけて対話をし、ブレインストーミングをして、異なった部局がいかに協力、対話が可能なのかということをやってみるとおっしゃっていて、日本でも経済部局と文化部局と都市計画は対話ができそうでなかなかできないのですが、それはどんな対話になったのでしょうか。教えていただければと思います。

(菅野)では、ロバートさん、これについて補足していただけますか。

(マライニセン)アムステルダム の将来についていろんなことが議論されました。また、文化が果たす役割、アムステルダム の将来における役割についても話し合いました。でもこれは簡単でした。もちろん運もありますが、現在、部の局長は、ほとんど文化やアートに興味を持っているからです。もちろん何をどのようにしてやるかということに関する議論はたくさんありますが、現在では、経済部門の方が文化と一緒にやるべきであるとか、空間部署がやるべきであるとかという議論はありません。仕事の一環になっているのです。

こういう課題は、さまざまなミーティングで話し合ってきております。今われわれの仕事の一環として、2カ月ごと、非公開、非公式のミーティングを行って、そこでオープンな形で、街のためにいろいろな課題について話し合っ、日々の作業の中からこういうものを解決しようとしているわけです。ですから、われわれは、よくミーティングを持ちたり、メールをお互いに出したりして、市にとって一番良い解決案を見いだそうとしておりますが、ほかの都市と同じように、場合によっては言い合いになってしまうこともあります。

(菅野)ありがとうございます。会場からロバートさんに二つほど質問が出ていますので、続いて答えていただいでよろしいでしょうか。

まず、アムステルダム市の助成なのですが、先ほどクリエイティブインダストリーということに関して、助成されている、支援されているというプレゼンをしていただきましたが、実際の予算はどのくらいの金額なのか。それから、助成という形以外の支援の施策はどういったものがあるでしょうかというご質問をいただいております。それについては先ほど幾つか事例をすでにおっしゃっていただきましたが、もうお一方からは、いわゆるインベストメントという言葉を使うのであれば、リターンというのはどういう形で得られるのか、あるいは数的に評価するシステムはあるでしょうかということですが、簡単で結構ですので、教えていただけますか。

(マライニセン)文化部局の年間予算は7000万ユーロです。これは文化に関して毎年計上している予算です。ただ、この中には、例えば図書館への投資などは入っていません。シティカウンスルの方がこういった資金を牛耳ってまして、新しい図書館建設には7000万ユーロ、新しいコンサートホールの建設には5500万ユーロを費やしました。こういった建設を続けてきますので、年間でおよそ2億ユーロを文化的な施設あるいは文化財団などに費やしていると思います。

それから、経済部局、空間部局がらみの予算があります。数字は持ち合わせていないのですが、かなり大きな額になると思います。それから、クリエイティブ産業と教育、すなわち市の教育部局が民

間企業と協力するということも行われていまして、評価ですが、目標として二つの新しい教育を向こう2年間で達成することになっていきます。

そういう意味で、このプログラムについては、かなりざっとしたものになっていますが、普通のプロジェクトの計画でも、プロジェクトの成果、予算を見て、それが評価の基準、ベースになります。

プロジェクト全体の評価はシンプルです。クリエイティブな企業、クリエイティブ企業で働いている人の数がアムステルダム地域内で増えるということです。毎年、それは数えています。ですので、数字が増えれば満足、数字が下がるとプロジェクトをやめるといったことになります。

また、個々の企業に対する投資になりますと、まず事業計画を策定してもらい、クリエイティブなプランにってもらい、実業家、クリエイティブな人たちが参画するコミッションを作ります。そして、カルチャーローンのような形で返済してもらいます。そのようにするのは、普通の銀行はリスクが高すぎると考えるからです。ただ、リボルビング基金のような形にして、一部を新たな投資、また再投資に向けてという形にしたいからです。

クリエイティブということに関しては、財務部局等も何がオーケーで何がオーケーでないかということについては、いろいろと議論をしますが、できる限り、限界まで広げてやっていきたいと思っています。また、これも市の中でやってはいますが、できる限りプロジェクトを実施するためには、時にはルールを曲げてでも、というような、これもメンタリティにまつわるころだと思っておりますが、こういった形を取っています。

(菅野)ありがとうございました。かなり具体的におっしゃっていただきました。

それでは、時間がそろそろ迫っていますので、会場の中からこれはぜひ聞きたいという質問がありましたら、お手を挙げていただけますか。特段ないでしょうか。ここにいらっしゃる方も、これから文化や芸術ということで都市や地域を活性化していこうとか、そういったことに関心がある方が集まっておられるかと思うのですが、もしこの場で聞きたいということがあれば……。

そうしましたら、この後、交流会が予定されているようなので、そのときにいろいろ直接伺っていただければと思います。

それでは、これから、横浜市も世界のいろいろな都市と競い合い、お互いに励まし合いながら、政策を進めていかれると思うのですが、エールといったところを少しずついただけたらと思います。それから、今日の感想でも結構です。後藤先生からはそれぞれの都市に対して、こうしたらしいのではないかとかというご提言があればおっしゃっていただいで、今日のパネル・ディスカッションを終わらせていただきたいと思っております。

では、川口さんからお願いいたします。

(川口)今日のお話を伺いますと、われわれはこういうことを始めて数年しかたっていないのですが、長い歴史の蓄積がかなりあって、そういう中でいろんな政策が生まれているのかなと思いました。われわれはいろんな方向性がぶれないように、ここで継続して、こういうことを進めていく。それが一番重要なことかなと思っております。

今、われわれはその基礎を作っているぐらいの段階で、それを一つの形として創造都市ヨコハマの実現という形に向かっていけたらなと思っております。そういう意味では、今日のお話は非常に参考になったと思っております。お二人には感謝しております。

(菅野)ありがとうございます。エヴァさんの場合はいろいろなアートNPOの方にお目にかかれたと思うのですが、これからまた交流をそれぞれ続けていかれると思うのです。そういった方々に何かエヴァさんからコメントなり、このようにしていこうということがありましたら、一言おっしゃっていただければと思います。

(テ・クラーク)今回は本当に素晴らしい方々とお会いしましたので、今後も交流を続けていきたいと思っております。アーティストの交流、アイデアの交流などです。これらのNPOは、文化的、クリエイティブな環境のためには、横浜市にとってとても大切だと思います。でも、彼らも政府の方からの支援が必要だと思いますし、それを長期的に考えるべきだと思うのです。というのは一つの場所から別の場所にとかなり移り変わっている人たちもおりますので、ある程度自分の評判をしっかりと得て、作業をしっかりと行う、また、その地域において名前を確立するためには、時間が必要だと思うからです。それが良い将来につながるのではないかと思います。

(菅野)ありがとうございます。後藤先生は最後をお願いしてよろしいですか。では、ロバートさん、お願いいたします。これから横浜市とまた交流を続けていかれて、情報交換、アイデアの交換もされるかと思いますが、コメントがありましたら。

(マライニセン)ぜひ引き続き、こういった形で政策レベルでも交流していきたいと思えます。日本のシステムについて、もっともっと学びたいという気持ちでおりますし、協力もしていきたいと思えます。それから、私はたくさんのお名刺をちょうだいしました。そして一部の方には、頂いた名刺を、アムステルダムの恐らく協力相手になれる人たちに渡しますよとお約束しました。ですので、今回の訪日から生まれてくるプロジェクトもあると思えますので、実現のためにぜひ努力したいと思います。ありがとうございました。

(菅野)ありがとうございます。では後藤先生、最後に。

(後藤)今日は日本のほかの都市の方や文化行政に携わっている方もいらしているかと思えます。日本では、こういうシンポジウムもたくさん行われていますし、『The Creative City』というランドリーの本が翻訳され、今、全部売り切れて、なんと1冊3万円という値段が付いてしまっているのですが、一応世に出てから何年かたっても、いまだに「クリエイティブシティって一体何ですか。いろんなシンポジウムに行っているんなことを言っているけれどもさっぱり分からない」ということを言われることが多く、今日はオランダ、あるいはアムステルダムの事例を通して少しお分かりいただけたかという気がするのです。

オランダの事例で私が感心するのは、ちゃんと合意形成が進んでいっていることです。先ほど、どうしてアーティストは支援される

べきか、アーティストに投資すべきか、ということに対して、ロバートさんは明快なお答えを幾つか出しておられました。先進国においては、アーティストは支援されるべきだと。あるいはクリエイティブインダストリーが成長産業であって、それに人口の7%が携わっているのだから、経済成長という意味でも非常に重要である。それからクリエイティブな人がいることは街を魅力的にするのだ。あるいはクリエイティブな人たちは新しい都市政策のアイデアなどを出してくれるから大事なのだということでした。

そういう合意が、文化だけでなく経済部局あるいは財政部局とも話したり、空間部局と話したりという対話を通してきちんとした合意になっていって、そういうベースがきちんとできた上で、エヴァさんがおっしゃっていたような哲学的な建築家がかかわって、コンセプトを作っていくプロセスを丁寧にしていくわけです。

ですので、こういうプロセスから日本の都市はもっと学ぶ必要があるのではないかということ、私は前から思っていたのですが、今日あらためて強く感じました。だから、何をしていくか、表面的に何ををして、何をつまみ食いして、まねすればいいのかというのはもうそろそろおやめになったらいかかかという感じが強くなります。

ロバートさんも実際にオランダのアムステルダムで政策づくりに携わっていらっしゃるわけですから、日本のそういうポリシーメーカーの人たちと、例えばロバートさんなどが本当に心を開いて対話する機会をもっと具体的に今後作ってほしいし、エヴァさんなどと、横浜でイニシアティブを取っていらっしゃるアーティストの人たちが、コンセプトも含めて交流するというワークショップ的な交流、あるいはディスカッションがもっと行われていくとお互いに学ぶことができよいかと思えました。

(菅野)ありがとうございました。見事にまとめていただいたのですが、先ほど司会の藁谷さんから、創造都市交流が2005年から始まって、2006年、2007年、今年が3年目ということだったのですが、交流する相手が毎回異なっていますので、これがやはり始まりであって、これから長いスパンの中で交流といったことが続いていくのだろうと思えます。

プロセスを共有し、お互いの知恵の交換、アイデアの交換、それで実際に実践していくということでその中で成果が生まれてくるのだと思えます。

日本の側が学ぶだけではなくて、日本の古い知恵や考え方、文化にもまだまだ私たちが海外ともシェアできるものがたくさん眠っていると思うのです。それを掘り起こしていくこと。それをまた海外の方と共有していくこと。それからもちろん、先ほど後藤先生におっしゃっていただきましたが、私たちが海外から学ぶもの。それぞれにまだまだ尽きぬものがあるかと思えます。これは宝探したと思うのですが、始まったばかりです。創造都市というのは簡単に生まれるものではないというのは皆さんの合意の中にあると思えます。誰か一人、行政がやるだけでなく、また民間のあるいはNPOの方たちだけではなくて、行政の方も市民の一人であり、ここにいらっしゃる方も皆さん市民の中の一人であることを考えれば、市民の方それぞれが持てる力を持って知恵を出し合い、この国を、あるいはこの地域が好きだから、この地域を良くしていこう。そういった心があってこそ創造都市というのは実現できるのだろうと思えます。

そういった創造都市、あるいは創造都市という言葉でなくてもいいのかもしれないのですが、誰もが生き生きと生きられる社会を目指すことが本当のクリエイティビティを活かしていくことだと私は理解しています。そんな地域に、あるいは社会に、国に、あるいは国を超えて、世界の人が考えられるように、楽しく暮らせるような目標に向かって一歩ずつ歩み続けられたらいいなと、皆さんのお話を伺いながら、私自身は考えておりました。

今日はお忙しいところ、本当に長い間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。これでシンポジウムは終わりますが、壇上にいらつしゃるロバートさん、後藤先生、エヴァさん、それから川口さん、全員の方にもう一度拍手をいただけますでしょうか。

#### 脚注

- ※1 Constant Nieuwenhuys
- ※2 Louis le Roy [www.ecokathedraal.nl](http://www.ecokathedraal.nl)

#### 講師・パネリスト略歴

○ロバート・マライニセン Robert Marijhsen  
1957年生まれ。首都アムステルダム市に勤務。アートマネージメント、レジャー、不動産、都市計画の分野でコンサルタントとして20年間勤めた後、2002年からアムステルダム市に勤務。「アムステルダムにおける文化行政の長期計画展望 2015」、文化行政プラン「クンステンプラン」2005-2008、2009-2012の策定に貢献した。「創造的産業育成プラン2005-2008」を立案・実施した。現在はクリエイティブ・シティーズ・アムステルダム・エリア(CCAA)\*で「創造的産業育成プラン2007-2010」の実施に携わっている。

※ CCAA: オランダ政府経済産業省が助成を行う「創造的産業育成プラン2007-2010」の実施機関。アムステルダム広域の地域間の文化政策を調整し、より効果的になるよう創造的産業の支援を行っている。アムステルダムがヨーロッパにおける創造都市の窓口となるべく創造都市間のネットワーク構築も手がけている。

○エヴァ・デ・クラーク Eva de Klerk  
1965年生まれ。心理学と情報伝達を学ぶ。先端アートの分野で芸術文化の発展に身を置いている。見捨てられ放置されたアムステルダムの一部地域で、孤立してしまっていたコミュニティとの活動を通して、地域・国を問わずすべてのレベルで、再生プログラムを実施すべきである、と主張する活動を行ってきた。ヒップ・ホップにスケボーから、アートクラフト市場、住居とスタジオを兼ねたアーティストのためのスペース提供、といった分野の発展に寄与するなど、人々の日々の需要を指し示すことにより、政府と業界と人々との、継続的な絆を形成する専門家として、活躍している。現在はNDSM Warf(オランダ造船会社の跡地を利用した巨大なアートスペース、芸術家の手により再生した)に勤める。 [www.evadeklerk.com](http://www.evadeklerk.com)

○後藤和子(ごとう かずこ)  
京都大学理学部卒業、京都大学大学院経済学研究科博士課程修了、博士(経済学)。現在、埼玉大学経済学部・経済科学研究科教授。国際文化経済学会理事、『文化経済学』編集長、エラスムス大学(オランダ)客員教授(2004年~2005年)。主な著書として、『文化と都市の公共政策-創造的産業と新しい都市政策の構想』(有斐閣/2005年)、『文化政策学』(編著)(有斐閣/2001年)、『芸術文化の公共政策』(勁草書房/1998年)、『創造都市への展望』(共著)(学芸出版/2007年)、『都市空間を創造する』(共著)(日本経済評論社/2006年)などあり。

○菅野幸子(かんの さちこ)  
国際交流基金情報センタープログラム・コーディネーター。プリティッシュ・カウンシル東京勤務後、1990年~1991年、グラスゴー大学美術史学部装飾芸術コースディプロマ課程に留学。翌年ディプロマ取得。1993年より国際交流基金(The Japan Foundation)に勤務。現在は、文化交流に関する調査、情報提供、各種コンサルテーションを行っている。  
横浜市創造界隈形成推進委員会委員、東京都芸術文化評議会専門員、総

務省地域づくり懇談会委員、(財)地域創造美術館活動の評価基準モデル策定に関する調査・研究委員会委員も務める。

○川口良一(かわぐち りょういち)

横浜市開港150周年・創造都市事業本部長。企画局プロジェクト推進室長、企画調整部長、道路局横浜環状道路担当理事、文化芸術創造都市事業本部長を経て、2006年4月から現職。文化芸術創造都市の実現に向け、企業・団体・行政による推進組織「創造都市横浜推進協議会」の設置、歴史的建造物を活用した文化芸術活動の推進や横浜トリエンナーレなどの施策に取り組む。

シンポジウム「クリエイティブシティ・ヨコハマの展望-多様な主体による推進事例を海外に学ぶ」

- ・主催：横浜市開港150周年・創造都市事業本部  
財団法人横浜市芸術文化振興財団
- ・共催：横浜赤レンガ倉庫1号館
- ・後援：オランダ王国大使館  
国際交流基金  
社団法人 企業メセナ協議会

## 視察参加団体によるプレゼンテーション「オランダ・ドイツ視察を活かした今後の活動計画」

### 大友恵理(Art Autonomy Network)

Art Autonomy Network(AAN)の大友と申します。

AANは、2005年にAANのメンバーである嘉藤笑子がロッテルダムにレジデンスで滞在しており、それ以来、オランダの芸術組織やアーティストとの交流を積み重ねてきました。後でお話しますが、私たちAANが日本において昨年度から取り組んでいる“アート・イニシアティブ”という考え方で、芸術家の担い手たちが自立的に、自発的に活動を切り開くという精神がありますが、そういったものは、私たちがこれまで交流してきたオランダの人たちに大いに刺激を受けて、自分たちの活動のヒントにしてきたように思っています。

この視察の成果で、私たちがAANの活動に反映したいと思っていることが三つあります。先ほど申し上げたような経緯から、AANにはオランダに関する資料がたくさんあるのですが、その数が今回の視察でさらに増えました。オランダの資料は、私たちが今所蔵しているアーカイブの中でも特に多いものです。それらの整理を進め、しっかりと使えるような形にしてゆき、今回私たちが視察をしてきてとても刺激を受けたことが少しでも多くの人々に伝わるように、たくさんの人々に活用してもらえるように取り組んでいきたいと思っております。

私たちは、美術館でもなく商業画廊とも異なる、自主的で独立した活動をしている芸術家や芸術組織について資料を収集し、このようなライブラリーを作っています。また、データベースにも取り組んでいます。こうしたものの中にオランダの資料の場所をしっかりと作っていききたいと思います。

アーカイブに関してはもう一つ反映させたいと思っていることがあります。国際的な文脈において、私たちのようにインディペンデントな活動としてアート・アーカイブに取り組んでいるところが幾つもあります。例えば香港のアジア・アート・アーカイブ、インドネシアですと、Indonesian Visual Art Archive (旧Cemeti Art Foundation)、それからロンドンのPILOTといった組織と私どもは交流を持っているのですが、今回のオランダに関しましては、アーティスト・イン・レジデンスのデータベースを提供するTransArtistsという組織がとても興味深いところでした。

AANはこうしたアーカイブに取り組む芸術組織同士のネットワークづくりを今後もっと力を入れていきたいと思っており、今年の3月29日、30日には、ロンドンからPILOTという著名なアーカイブの組織を日本にお招きします。彼らと一緒にアーカイブの今後の新たな活用や、アーティストのポートフォリオといったものについてトークイベントを予定しております。

その次のステップとして、1年後の2009年3月開催を目指して助成金を申請しておりますが、PILOTだけではなく複数のアーカイブ関連の組織を海外から招聘してシンポジウムを開催したいと思っております。その中にオランダの組織などもぜひ招き入れられたらと考えております。

三つ目の事業として、私たちが考えているものはSHOWCASEです。これは約1年前に私たちAANが横浜市との協働事業として開催したもので、「アート・イニシアティブの創造性：芸術が行動する社会へ」をテーマに、日本全国で自立的に活動展開する芸術団体約50組が横浜に一堂に会することで、日本でこれだけの組織が精力的に活動しているということを包括的に紹介する試みでした。そこに集まったアート活動の当事者同士が出会ったり意見交換をする場として、2007年2月にSHOWCASEというものを開催しました。

今回の視察の成果を反映させる事業として、このSHOWCASEをもっと国際的なネットワークにつながる形でもう一度開催したいと考えております。

日本の芸術組織というのは地方にはたくさんありますが、その活動を海外にまで発信出来ておりませんので、そうしたところをもっと海外へネットワークがつながることで可能性を広げていったり、先ほども何度かパネル・ディスカッションでも出てきましたが、こういったボトムアップ的に実際に取り組んでいる人たちがもっと力をつけていくためにはどうしたらいいかということ、このプログラムを通して探っていきたいと思っております。

以上でAANの活動計画について終わります。

### 【行動計画書】

- 団体名： Art Autonomy Network
- 代表者名： 嘉藤笑子
- 所在地： 〒231-0013 横浜市中区住吉町1-8-401
- 主な活動内容  
美術館や商業画廊とは異なる領域の芸術組織のインフラ作りとして、アート・アーカイブによる情報提供、トークイベントやレクチャー、シンポジウム等通じてのネットワーク構築や教育普及を行う。
- 参考とした視察先と内容  
文化政策や環境、システムなど、オランダについて全般的に参考にしてはいるが、特に情報発信を手がけるSICAやTransArtists、Res Artisの事業を参考にしている。
- 事業名  
・アート・アーカイブ  
・SHOWCASE
- 事業目的  
AANが進めてきた自立的に活動する芸術団体のネットワーク作りは、横浜市との協働事業「アート・イニシアティブ・シティ実行委員会」で開催した「SHOWCASE」(2007)において大きな成果をあげた。その次の課題として日本の芸術組織と海外組織の交流促進やネットワークの国際化を図る。
- 実施時期： 2008-2009年
- 実施会場： Art Autonomy Network 他

## ○ 事業内容

- ・ オランダのアート・アーカイブの強化  
AANは、嘉藤のレジデンス滞在(2005年)以来、オランダの芸術組織および芸術家についてリサーチや交流を独自に重ねており、それに関する資料も相当数蓄積している。今回の視察で得た資料も加え、オランダのアート・アーカイブとして整理・充実を図るとともに、活用強化を進める。
  - ・ アート・アーカイブ・ミーティング(仮)  
SICAやTransArtistのように芸術関連のデータベースやアーカイブを手がける組織を海外より招聘してのシンポジウムを開催し、今日的なアーカイブの活用方法やシステムの連携を探りながら、国際的なアーカイブ・ネットワークの構築する。
  - ・ SHOWCASE 2008  
招聘組織の対象として国内組織だけでなく海外からの招聘組織枠を拡大し、情報発信を強化するとともに、国際レベルのネットワーク作りの場を提供する。海外招聘枠にオランダの組織を加える。
- ## ○ 視察成果を反映した部分
- ・ 各視察先にて入手した資料をアーカイブに追加。
  - ・ アーカイブや芸術組織の国際的ネットワーク構築にあたり、視察訪問したり情報を得た芸術団体との協力・連携を図る。

## 細川浩伸(NPO法人アートプラットフォーム)

急な坂スタジオの細川といいます。NPO法人アートプラットフォームという横浜野毛山にある急な坂スタジオを運営している団体に所属しております。今回、創造都市交流事業にてオランダ、ドイツの方の視察の機会をいただきまして、ありがとうございました。またこのような行動計画発表の機会も設けていただきまして、本当にありがとうございます。

では、実際、この創造都市交流でオランダとドイツの両方に行ったときに見た中で、今回発表する行動計画は、実は言葉でいうとすごく単純なことで、アーティスト・イン・レジデンスの施設を横浜に作りたいということです。なぜそれが必要かということを説明したいと思います。

まず、なぜというところで、急な坂スタジオがどういうところが簡単に説明させていただきます。ここに大きく書いてあるとおり、稽古場なのですが、「稽古だけじゃない稽古場」として運営しています。実際に、ダンス、演劇の稽古の場所としてスペースを貸しています。(スライドにて)ご覧になられますような事業を展開しております。マンスリーアートカフェというトークイベントを毎月1回。いろいろな人に聞いてもらえる、アートと社会について知識を得るような事業です。

またセミナーの方ではもっと専門的に、各ゼミ交互に隔週にて開催しています。もっと実際にものを作るための企画ゼミや、作ることに必要な思想ゼミを開いています。

フィールドワークでは、劇場空間、また劇場になり得る横浜の空間です。山手の洋館を巡ったり、BankARTや寿町も見て回ったり、そのほかにも横浜にぎわい座のホールなども見て周り、いろんな人たちに横浜はこういうところだということも知っていただくという事

業です。舞台として上演できる、いわゆる制作側の人たちに向けたものではあるのですが、舞台に興味ある人にも参加していただける、そういった活動も行っています。

勿論その他にも舞台芸術をよく知ってもらうためのワークショップを開催したり、イベントを開いたりしています。

そういった中で、前年秋に、われわれは国際交流プログラムとして、急な坂スタジオでイスラエルのダンサーを一人呼んでワークショップ形式での作品制作、発表を目的とした1カ月間の滞在制作(レジデンス)を行いました。そのときに感じたこと、言葉の問題よりも、急な坂スタジオのようにしっかりとした稽古場で稽古するという環境はまず重要なのですが、それ以上にもっと横浜のことを知って作品に活かすためには、もっと長期間この場所に滞在しているいろいろなものを見る必要がありました。アルカディ・ザイデスというアーティストなのですが、実際にまず(日本、横浜に)着いた次の日に横浜を1日中フィールドワークして、(参加者の)皆さんと一緒に歩き回りました。

そういった活動を続けていく中で、横浜に住んでいる人(観る人)にとっては、(アーティストが)横浜の雰囲気や作品創作の中に取り入れていくことが、本当はもっと必要なのではないかと感じていました。というのは、今、急な坂スタジオ自体ではレジデント・アーティストといって稽古場を拠点としているアーティストが岡田利規(チェルフィッチュ)をはじめとして4人います。海外でも結構紹介されることが増えました。そういったレジデント・アーティストたちも、もっと交流の場を持ったり、集中して稽古をしたりするためには、横浜にもっと長く居る必要があります。しかし、今彼らは東京から通ってくるということで、稽古自体に集中するのなかなか難しい状況があります。そういった中で、われわれが今後事業として展開していく上で、やはり面白いものを皆さまに提供したいと思っていますし、また新しい創造の中で作っていく場合に、レジデント施設がやはり必要だと強く思っています。

ということで、今回この行動計画に、レジデント施設として提案させていただきます。今日のシンポジウムを含め、いろんな話を聞かせていただいた上で、中長期の先駆的活動支援ということを考えていたのですが、実際この書面で書いている3カ月~1カ年というのはやはり短いかなと思ひまして、4年、10年というもっと長いスパンで、創造活動をしっかりと支援していくように、われわれももっと頑張っていきたいと実感しました。海外ではそういったことが進んでいるので、今後もいろいろ勉強させてもらって、来年度の事業にぜひともつなげたいと思います。

実施したい場所は、横浜市の新山下町にあります。横浜税関の公務員住宅が今使われていないのですが、場所の立地としてもみなとみらい線の終着点から歩いて5分以内というすごく良い場所にありますし、また、元町からこちらの赤レンガの方まで来るときの道も大変綺麗で、いろいろな創造、創作する過程としての環境も良いのではないかと思います。ということで、簡単ですが、発表は以上とさせていただきます。

## 【行動計画書】

- 団体名：NPO法人アートプラットフォーム
- 代表者名：相馬千秋

- 所在地：横浜市西区老松町26-1 急な坂スタジオ
- 主な活動内容
 

2007年5月に設立。「横浜アートプラットフォーム 急な坂スタジオ」の管理・運営をはじめ、舞台芸術に携わる人材の育成や国際交流の推進、地域とアーティストの交流の場を生み出すことを目的とする。芸術と社会をつなぐプラットフォームとして、アーティストや制作者を支援し、豊かな市民社会の実現を目指すさまざまなプロジェクトを立ち上げている。
- 参考とした視察先と内容
 

Zollverein 地域を文化資産として、村の様な交流を取り込んだコンセプトにより産業と創造性の融合をはかっていること。専門性と教育・文化活動などが交わることで新たな産業の可能性を生み、強い発信力としていること。
- 事業名
 

Yokohama Visitor's Village Laboratory (新規事業)
- 事業目的
 

研究および活動支援施設に宿泊施設を併設することにより、横浜へ来訪するアーティストによる中長期の文化活動をプログラム化することを目的とする。またスクール、公開トークなどの事業を組み込むことで、一般の方々にも開放する機会を設け、広く文化の支援、振興および向上を目的とする。
- 実施時期：2008年4月から横浜市と協議開始を希望する
- 実施会場：横浜税関公務員住宅(新山下)
- 事業内容
  1. 文化人の往来
 

横浜での中長期的な文化芸術活動の支援とアーティストの交流を図る。滞在する必要がある、アーティスト及びその事業に関わる者を宿泊可能とする。
  2. 中長期間の先駆的活動支援。
 

3ヶ月～1年間の先鋭的な創造活動を行うアーティストを招聘、支援する。より横浜で創造することの必然性を生み出し、横浜の文化意識レベルの向上をはかる。
  3. 専門活動の公開と研究
 

展示とは違い、活動を対象としていくことで中長期的に横浜との関係をその成果に反映することができる。その為の専門施設とすることが必要。視察成果を反映した部分
- 視察成果を反映した部分
 

Zollverein内PACTの活動。レジデントプログラムが行える宿泊施設をもっていることで数多くのコラボレーションワークを開催できている。この事業についてもYokohama Hostel Villageを運営するFunnyBee株式会社のもつ都市構想との思索、議論を通じて共同で行うことが重要。専門家と創造を交わせることで産業に結びつけ新たな創造を可能にする部分。

## 細淵太麻紀(BankART1929)

BankART1929の細淵太麻紀と申します。私はもともと美術や建築など、ものを作る側の人間なのですが、今はBankART1929の運営に取り組んでおります。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちBankART1929がどんなことをしているかというこ

とを簡単に説明します。

元銀行の「BankART 1929 Yokohama」と元港湾倉庫の「BankART Studio NYK」、それから黄金町エリアの方に「BankART桜荘」という小さなレジデンススペースがあるのですが、そうした建物を基点に、周辺地域を芸術文化活動によって活性化していく活動を行っております。これらの建物の空間を最大限に活用して、横浜が持っているポテンシャルを引き出すような主催事業、この空間で何かしたいというオファーを実現化するコーディネート事業、スクール、カフェ、パブ、ショップ、スタジオ、コンテンツ事業などを行っております。都市への拡がりというと、北仲や本町ビルなど空いている建物へのアーティストの誘致や、眠っている古い写真を収集する「横濱モボ・モガを探せ!」プロジェクト、現在開催中の「食と現代美術展」の中では、周囲の飲食店など130店舗に協力をいただき、店舗の中に作品を展示させていただく「横浜芸術のれん街」のようなことも行ってきております。施設運営だけにとどまらず、「福祉とアート」、「防災とアート」等、アートを通じたさまざまな活動をしてきております。自己紹介はこれぐらいにして、本題に入りたいと思います。

私たちBankART1929からは、「オルタナティブ・スペースの現在についての調査研究および出版化、コーディネーター・エクステンジ・プログラム」を提案したいと思います。

視察の中では、特にアムステルダムでのクリエイティブシティに関する事業はとても印象深いものでした。巨大な建物がかつて不法占拠していたアーティストたちが、市の施策により、土地や建物を安価で借り受け、ハード整備やソフト事業を担うことで、住民の主体性が伴う豊かな都市へと見事に再生している姿を、私たちは生で見えました。日本では考えられないようなこのような思い切った施策は、これからの新しい都市の在り方を示唆していると実感しました。

特に今回お話いただきました、NDSM Wharfのような活動は、経済的にはもちろんのこと、精神的にも社会を豊かにしていくであろうということを確認しました。それらは、アーティストたちの社会に対する実利的な行為や直接的な社会還元によってというよりも、彼らの「ものを創る」という行為に対する喜びや執着、によるものであるのではないかと思います。

彼らはアーティスト個人の力ではどうにもならないことも、いろいろな人に知恵や力を借りながら、実現不可能と思われるようなことも実現していける、したたかさや精神性を兼ね備えているということを実感しました。今はうまくいっていない部分があっても、彼らはそれらをひっくり返す力を持っていると確信しています。そして、そのことが、私たちにさらなる勇気を与えてくださいました。

とはいえ、彼らは建物やイニシアティブにかかるお金は手に入れましたが、これからランニングしていくことに対して、安定的なお金が出ていないわけではないようです。それは、日本とも状況が似ているところですが、それらをどうやって維持していくか、アートによってどのようにお金を稼いでいくかということが共通の課題なのではないかと思います。

先日、ロバートさんとエヴァさんにBankARTにいらしていただいた際に、特にNYKの建物についてだと思いますが、「オランダでは制作のためのスタジオはたくさんあるけれども、発表のためのス

ベースについてはこんなに大きなものはないので、素晴らしい」と言っていたことはすごく印象的でした。私たちはもちろんこの空間の豊かさを自覚しています。これらの素晴らしい財産を120%活用していくことに、これまでも力を注いできましたし、今後もそういった活動を継続し、維持していくことが自分たちの課題だと考えています。

この視察を終えて思ったことは、時間が限られた視察であったということもあり、実際に個々の活動団体がどのような経済的な基盤を持っているかや、彼らの立ち位置についてなど、もう少し深く知りたかったということでした。アーティストと市民、アーティストと行政の関係、またそれらを具体的に実践する中間支援団体の運営方法とか、課せられているオブリゲーション等、現場レベルでの生の情報をもう少し詳細に引き出したいと思いました。

そして今回視察したオランダを筆頭に、そういった先進的な活動をしているヨーロッパやアジアまで含めて、さまざまな事例を調査しながら、その空間を実際に運営している人間と交通しながら、研究を進めたいと思いました。

そしてそれを自分たちの血肉としていくと同時に、日本の中で同様な問題や課題を抱えている人たちにに対しても参考になるような情報として出版化し、まとめていきたいと思っています。

私たちBankARTの2006年から2008年度の計画案の骨子のひとつに「他都市および国際的なネットワークの構築」を掲げていることから、そういった海外の先進的なアーティストやアドミニストレーターと具体的に人的な交流を行いながら、これからの活動につなげていきたいと思いました。

国や地域によって、アートに対する状況が違うということはもちろんあるのですが、私が最も違うと感じたことは、アーティストも含んだ、そこで実際に生活している人々が、社会に対して持っている問題意識の強さと、そこに立ち向かう勇気、それからその勇気を引き出すような施策、それらがクリエイティブな回答を彼らの都市の中に生み出しているのではないかと思います。

先ほど、ボトムアップとカトップダウンというお話があったのですが、横浜では既にボールは投げられているわけで、そのキャッチボールがどのくらいできるかと思うのです。どれくらいお互いが本気でキャッチボールを続けられるかが重要だと思います。もちろんそれを促すことが私たちの役目だと思っております。

そういったことも含め、ほかの都市の人たちとお互いに交流することで、お互いに影響を与えながら吸収し合えるのではないかと思います、この提案をしました。

最後になりましたが、このような貴重な経験をさせていただきましたこと、関係の皆さまに御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

#### 【行動計画書】

○ 団体名：BankART1929

○ 代表者名：池田 修

○ 所在地：横浜市中区本町6-50-1

○ 主な活動内容

横浜市が推進する、歴史的建造物や港湾施設等を文化芸術に活用しながら、都心部再生の起点にしていこうとするプロジェクト

トのひとつ。2003年3月に実験事業としてスタートし、2006年度からは本格事業へと移行。旧第一銀行を活用した「BankART 1929 Yokohama」と日本郵船の湾岸倉庫を利用した「BankART Studio NYK」を主な拠点として活動を行っている。範囲はアート、建築、パフォーマンス、音楽、会議他あらゆるジャンル。スタジオ、スクール、カフェバブ、ブックショップ、コンテンツ制作をベースにししながら、主催、コーディネート事業等、年間650本以上の事業を活発に行っている。2006年7月には主にアーティストインレジデンス機能をもつBankART桜荘がオープン。

○ 参考とした視察先と内容

歴史的建造物や産業遺構等、使われなくなった建物を最大限に活用し都市の再開発と文化活動とを推進させているアムステルダムクリエイティブシティ事業全般。行政側の考え方と、運営を司るアートNPOに与えられたミッションとその実際の活動。

○ 事業名

・オルタナティブスペースの現在についての調査研究及び出版化—コーディネーターエクステンジブプログラム(継続)

○ 事業目的

オランダを含めて、欧米では、様々な社会状況の変化の中で、オルタナティブスペースが進化をとげ、新しい局面を迎えつつあることは確かだ。日本にもオルタナティブスペースがないわけではないが、規模においても継続性においても、また公共性においても比較できるようなレベルに達しているものは少ない。私たちBankARTの2006~2008年度の計画案の骨子のひとつに「他都市及び国際的なネットワークの構築」を掲げていることから、そういった施設のそれぞれの構造を調査研究すること、またそういった施設と具体的な交流を始めるということを提案したい。

○ 実施時期：2008年度

○ 実施会場：BankART Studio NYK ほか

○ 事業内容

オランダの産業遺構を活用した施設はどれも規模が大きい。芸術活動を行うためにこのレベルの建物を維持管理する経済的な裏付けはどうなっているのか？また公的資金の投入がなされる場合、どの程度のミッションが運営組織に課せられるのか？そういったことをヨーロッパ、アジア圏まで含めて調査研究しつつ、その空間を実際に運営している人間と交通しながら、調査研究を進めたい。またそういった施設のアーティストやアドミニストレーターと交換レジデンスプログラムも行っていきたい。

○ 視察成果を反映した部分

オランダはもともとアーティストにとって優遇的な政策をとっていると見聞していたが、実際に視察にいったら、それらが根付き、また新たな局面を迎えているということがとても良くわかった。行政の意識も、アーティスト救済のための優遇政策から、アートを産業化することに意義を見だし、社会の中での重要性を説いていくための政策になっている。政策ポリシーと経済やその立ち位置について、またそれらを具体的に実践する担い手の方法、現場レベルでの生の情報を詳細に引き出したいと思

った。そしてそれを自分たち自身の活動の血肉としていくと同時に、日本のなかで同じような問題や課題をかかえる人たちに對しても参考になる情報としてまとめていきたい。

## 福島慶介(Funnybee株式会社)

今回、Funnybeeの代表として視察に参加させていただきました福島です。視察成果としての行動計画を発表させていただきます。

まずFunnybeeについて、知識を共有したいと思います。Funnybeeは、YOKOHAMA HOSTEL VILLAGEを中心に横浜寿町をフィールドとして活動しているソーシャルベンチャー株式会社です。以下YHVとさせていただきます。特にカラーの右側の写真はすごく象徴的ですが、寿町はドヤ街と呼ばれる、かつて横浜の発展を支えた場所です。

YHVが実際何をしているかというと、右下の地図が寿エリアと呼ばれるエリアですが、約200m×300mのエリア内に存在するドヤ約110棟内の8000室うち、空き1500室の稼働していない部屋を対象に Hostel 計画を行っています。バックパッカーをはじめとした外からの人を招き入れることを行って、既存の街との共生を大事にしながら、街の雰囲気の改善、さらには雇用の創出を目的に活動しております。

右下の地図上の青い部分がフロントに当たるのですが、現状、ここをフロントとしてまず構えて、建物単位ではなく部屋単位で、街の中に部屋を契約させていただいて… 緑色の部分がそうなのですが、全体を一つのビレッジとして扱うような計画になっております。立地の良さを活かして横浜に新しいダイアグラムを描けるのではないかと考えております。

今回の視察の行動計画として、寿アートフィールド計画をやりたいと思います。実はこれは行動計画書には新規になっていますが、大きな流れとしては継続という形であり、これまでもしてきていることです。

それに至るストーリーがあるのですが、それはドヤ街、寿町の居住空間は狭小で… ちよっと見づらんですが、右側の写真にあるようにそれぞれの部屋が4平米ぐらしかありません。そうすると、居室以外のスペースにラウンジの要素が必要になってくる。特に外部空間は… 寿エリアには信号がなくて、リビング的な扱いをされている。右下の写真にあるように、夏は、結構その辺で寝ているおじさんたちがたくさんいるような状況だったりします。

これらの与条件から導かれるのは、やはりまず外部空間の充実であると。それでYHVを軸に、地縁を活かした寿アートフィールドをこれからもっともっとやっていきたいと考えております。寿町のようなある意味で彩度を失っている街をアートで彩ってきたいというスタンスです。

アートスタンスによるこれまでの活動は、まず根本としては、問題解決のストーリーの中にアートの要素を盛り込んでいくというプロセスを踏んでいます。ざっとこれまでのことが出ていますが、それぞれやはり問題意識が僕たちにはまずあって、その問題を解決していくための方法を実践する中で、アートの要素を盛り込んでいった。例えば、まず街を知ってもらうということで、寿のプロモーションムービーを制作しました。この街はこれだけのインパクトがあるにも

関わらずあまり知られていないのでまずプロモーションしてみたということです。…街がとにかく汚いというか、アスファルトににおいが染み込んでいたり、衛生的に良くないので、「花いっぱいプロジェクト」というので、雰囲気改善したり緑化も行っています。ストリートファニチャー的な、外部空間を充実させるようなプロジェクトも行いました。あと、寿選挙PR活動というのは… 右下の方にそのときのポスターがありますが、行政側との連携で、こういうPR活動をしました。これは、特にこの右から2番目の下の方のものです。街の中に選挙の投票所までの三角形のカラフルな矢印をずっと置いていきました。それは、死票を減らして投票率を上げたという結果を生んだのですが、一方で、街のにぎわいというか、テンションを上げるような効果もこれで実現できたかと思っております。

まだまだアートを活かせる余地はたくさんあると思います。例えば、現状では、この地域には看板がたくさんあるので、それらを活かしたアートワークを考えています。また、エヴァさんからもいくつかのアドバイスがあったのですが、例えばかつて不法投棄をされていた場所に、ブランターを置くことでそれを抑制したという経緯があって、でも、そこにはデザインが欠けていて… その辺もどんどん積極的にやっていくべきではないかと。寿アートフィールドでは、ほかに幾つか現在考えていることなどあります。

ここからは新規事業という形になるのですが、レジデンス機能をもっと活用して、パフォーマンスを発揮していくべきではないかと考えております。それにはアーティストの滞在を誘致するとか、例えば先ほど発表してくださった中間支援の方々とレジデンス契約をするとか。あと、YHVの独自のプログラムとして、中間支援組織の役割を担っていくこともこれから視野に入れていきたいと思っております。YHVの契約部屋数が60まで増えてきていますので、これからは単なるホステルスペースだけではなく、新しい部屋の使い方も可能になってきているのではないかと考えております。

以上ですが、最後に… やはり今回唯一の株式会社として民間であることで可能になった流れがあるので、それを大事にしていきたいと考えております。一方で、行政との連携をもっとしていきたいと。資金面でなかなか難しいところもあるので、その辺はうまくお付き合いができればと考えております。街というのは10年といった単位で考えなければなりません。そこを見据えて街の雰囲気が壊れない、魅力のあるまちづくりをしていきたいと考えております。恐らくそういう地域特有のコンテキストを明確にしていく作業がクリエイティブシティなのではないかというスタンスで、われわれは考えております。以上です。ありがとうございました。

### 【行動計画書】

- 団体名：Funnybee株式会社
- 代表者名：谷津倉智子
- 所在地：横浜市中区不老町3-14-5 中外ビル302
- 主な活動内容  
寿町での空き家活用、様々なアートイベント、映像作品制作等
- 参考とした視察先と内容  
NDSM Wharf.単体の建物内部に限定されたスペースではなく、広がりを持ったエリアを対象にしていることで展示スペース・スタジオスペースのみならず様々な要素が集合した「街」として機

能している。また、本来極めて「生活」に近い現場から生まれてきた歴史的遺構のリノベーションである。

○ 事業名

寿アートフィールドプロジェクト(継続事業)

○ 事業目的

寿町地区にアートの特効性を利用した活気・雰囲気作りを行っていく。あくまでも、既存の様々な要素との共存を図りつつ、徒歩圏内に魅力的な空間を創出し、ここにしかない「寿アートフィールド」を作り、新たな産業へとつなげたい。宿泊機能であることのアドバンテージを最大限に活かす。

○ 実施時期：継続中

○ 実施会場：寿町地区

○ 事業内容

・アートフィールドの形成

建物単位ではなく、階単位・室単位でドヤと契約していることで、寿地区にホテルビレッジの有機的ネットワークが構築されている。街の余剰を利用したそれらのスペースを軸に、街全体を豊かにするような雰囲気作りを模索したい。そのツールの軸に様々なアートワークを位置づけ、アートフィールドを形成。特に外部空間の充実を寿地区の重要な課題として捉えていく。

・外部組織との連携

行政側や他の中間支援組織との連携を考える。すでにコンテンツを持っている他の中間支援組織と契約をし、レジデンス施設として機能させる。滞在アーティストとの様々なコラボレーションの形も見えてくるだろうし、アーティストの滞在自体が街の雰囲気を形作っていくと予想される。

・独自のレジデンスプログラム

外部組織の連携に加えて、独自のレジデンスプログラムを提案する。寿の外部スペースに滞在アーティストによる作品制作を依頼することや、ワークショップの開催なども視野に入れていきたい。

○ 視察成果を反映した部分

NDSM Wharfの歴史に見られる一連のプロセス。行政側の支援から始まる流れではなく、民間側から自然発生的に生まれていった内側からの動きが外側へと広がり、最終的には行政側からの支援も得られつつ、新たな産業を生み出している。具体的コンテンツというよりも、そのプロセスに重ね合わせたい。